家相奥傳講義

西之巻

特217
522

始

特217
522

園田眞次郎講述

家相奥傳講義

西之巻

東京 大正館研友會版

帝國圖書館藏
昭和十一年

著者最近の筆蹟と近影

家相奥傳講義　西之巻　目次

口繪・著者最近の筆蹟と近影……一
家相の教へは太陽の眞理……四

□……前編

西方兌宮は天地の兌び也……七
兌位鑑定は金銀財寶が基……九
金錢上の紛爭は西缺け也……一一
西缺けに於て成功が極惡……一三
先天後天共に西方は惱み……一五
家相は人間生活を支配す……一九

□……後編

家相とは如何なることか……二一
家相の骨子は何所にある……二三
家相の眞意義を理解せよ……二七
西方位張り缺けの重大性……三〇

西方凶相の慘禍する由來……三一
肺の疾患發生は西缺け也……三四
鑑定の上に現れたる實例……三六
金の出來ない西缺ける家相……三九
西方廊下の凶相は如何に……四一
西張り家相の妻君の實力……四七
家相鑑定上の基礎的資料……四九
家相の眞理は天地の眞理……五三
西方相剋の恐るべき實例……五六
美名發揮後に滅亡の家相……六〇
重病の發生する兇惡家相……六五
西と戌亥張り家相の特徵……七一
親類と密接關係ある家相……七三
主婦が大金持になる家相……七七
吉相であつて凶相に變る……七九
金運の家相も忽ち潰滅す……八〇
家相は天地の法に準據す……八三
三方跨りは非常に吉相也……八四

家相の教へは太陽の眞理

古來『家相』に關する書籍は決して尠くないが、其の多くは東西南北乾巽坤艮の各方位に於ける『張出し』乃至『別棟』の有無に關して、簡單に宜いとか惡いとかを述べてあるに過ぎなく、何等根據となる可き眞理が解かれて居らない。從つて、學者は文獻のみに準據するが故に迷信だと謂ひ、一般には半信半疑の狀態で何れも迷信的水掛論に終始してゐるのである。然し人智の發達した今日まで迷信扱ひにされながら猶ほ且八ヶ間敷く論議されて居る以外に、古より言ひ傳へられて居る家の凶相から、應々豫期せざる不幸を招來する實際問題に鑑みて、全然これを捨て去る譯に行かないものゝ如くである。蓋し、其處に未知の大眞理のある事を悟らなければならぬ。

天地の間には『相』がある。『相』とは『氣』を指して謂ひ、『氣』は、木、火、土、金、水、の五行を以て構成されて居る。其の天地の『氣』が家の中へ這入て『家相』となり、其の『家相』は四六時中吾々に働きかけて吾々の『思想』を作る。而し『家相』に因つて生成された吾吾の『思想』は、決して一樣ではない。蓋し、建築の樣式が異るが故に其の家の中に充滿する『相』が異つて居り、同時にまた斯の『相』は天幹地支の『氣』と交錯して、相生相尅の關係をつくつて、『家相』の太極に甚大なる影響を及ぼして行くから、『家相』に支配されてつくられて行く吾々の『思想』は、百人が百人、千人萬人ともに同一のものは無い譯である。

× × ×

從つて吾々は吾々の『思想』が趣く儘に放任すれば、世の中は忽ちの間に暗黑面を展開する。其處に宗教の必要が起り、人倫道德の道が教へられて居る次第であり、其等は何れも『法』に基ゐて行はれてゐる。天地には天地の大法がある。我が日本國には國法がある。吾々の家庭には家庭の法がなくてはならぬ。是等の『法』は一切萬事曲げる事は出來ない。即ち、家庭の法を曲げれば其の家庭は禽獸の棲家となる。國の法を曲げれば國の秩序は極度に紊亂して遂に其の國を失ふ事になる。それ若し天地の法を曲げる時は、吾々の生命を失うて本來空に化して仕舞ふのである。是即ち「天の道に順ふものは榮え、天の道に逆ふ者は亡ぶ」と聖人孔子が喝破した所以である。

然らば、天地の大法とは如何なる事を謂ふか。是は吾々が日頃提唱して居る處の『氣學』其のものを指すのである。『氣學』とは太陽の眞理が教へて居る大宗教であつて、是が『方位』と

なり『家相』となつて、吾々に絶對的幸福を齎し、引いて我が大日本國の興隆に專念する大思想を、最も簡明直截に教へた處の實學であるから、此の『氣學』は吾々の日常の生活なりと謂ふも、敢へて過言ではないのである。

世の中で賢者だとたゝえられ、また愚者なりとさげすまれたからとて、それは客觀と主觀との相違であつて、賢者必ずしも賢者に非ず、また愚者必ずしも愚者に非ず、悧巧なのと馬鹿とは紙一枚の違ひであつて、馬鹿だからとて必ずしも出世が出來ないとは限らない。蓋し、吾々が日常幾多の鑑定に於て、賢者も愚者も等しく生れた『家相』と其の後に於ける『方位』の關係に支配されてゐる事を如實に立證し得るからである。斯くて、愚者と稱せらるゝ者も其の後に於て重ねて吉方を使用し、または良相の家屋に住居する事によつて、現に意外の成功を遂げて居るからである。して觀ると、太陽が永世の理想として變らない營業を續けて居る春夏秋冬の季候と、萬物の生成を行ふて行く眞理は、吾々の日常の生活に當て箝めて見て少しも變らないのである。此の哲理を植付けたものが『家相』であり『方位』となるのであるから、斯學が迷信であるとの愚者の叫びを徹底的に撲滅して、大衆を一人でも多く幸福なる天地に舞樂せしむるやう、大乘の精神を發揮すべきである。

家相奧傳講義　西之巻　前編

園田眞次郎述

西方兌宮は天地の兌び也

天地の秋は西方で、西方を『兌宮』と申します。秋とは毎年八月九日立秋節より十一月七日立冬節の前日までの期間であります。而して西の方位は西の中心點から左へ十五度、右へ十五度、合せて三十度の圈内を謂ふのであります。尙ほ西方の圈内を四十五度に採つて居るものが大多數でありますが、是は大正館が四十餘年間幾千幾萬の人々の運命竝に家相を鑑定した體驗から四十五度は誤りで、三十度が正確である事を

如實に確めて居る譯でありますから、此處に附言して置きます。兎に角も、西方兌宮は庚、酉、辛、の領域を指していひます。

西方秋に關しては、說卦傳に『**兌乎說言す。兌は正秋也。萬物の兌ぶ所也。故に曰く、兌に說言す**』と述べられて居ります。說言すとは、農村に於ける大豊年萬作の最大の喜悅であつて、豊年祭に身も心も忘れて雀躍の如く歌ひ舞ふ天地の兌びを意味するものであります。**從つて、秋の喜びは一切の目的を達成して安堵する眞の兌びを指して謂はれて居る事は言ふまでもありません。**老子が『**功成り名を遂げて、而して身を退くは、天の道なり**』と曰はれてゐるのと同じ意味であつて、目的の達成した處に正しく強い悅びがあります。

即ち、この秋を悅びとする所以は、秋の期間内に於て天下の萬草木は、皆、實を結び各々自己の使命を果すべき天の時に遭遇して居るからであります。殊に人類の常食物である。稻、麥、豆、粟、黍の五穀も秋の終りの十一月八日迄には全部結實し、其の他柿、栗、蜜柑、葡萄、胡桃等の果實類の一切に至る迄悉く結實して、天の命ずる任務を完ふし終るのが秋と云ふ天下の『大相』であります。この原理に基きて、兌を秋とし、又兌びとする所以であります。即ち、秋は其の歲の仕事を終了した萬物が、皆、ともに兌ぶのであるから、秋季は即ち天下の兌びであります。

結實した五穀竝に果實が秋に成熟すれば、其の成熟したものの全部は悉く黃金と交換されるのであるから、五穀竝に果實類の全部は、人間界に金貨銀貨を授くる悅びで、是が、兌を兌びとし秋とする所以であります。詰り、秋は天下の兌び、萬物自體の兌び、人類全部の悅びとなるのであります。

兌位鑑定は金銀財寶が基

住宅の兌位『張出し』吉相は兌を悅びとする。即ち、其の吉相に住する人々に其の悅びが來る『張り出し』は悅びを創造する力であります。其の悅びとは金銀財寶を豊富に溜めると云ふ義になつて居ります。兌の裏は艮の八白にして、艮を慾心とし又艮を溜めるとする。即ち、艮を止まるとする原理に基くのであります。然る故に、住宅

西方の局部に『張出し』吉相があれば、其の家運は金銀財寶を溜めて家族皆ともに悦ぶ判斷となります。

人生の世渡りに於て黄金力ほど萬能を盡す妙力はありません、金力の作用と働きは一言にして天下國家を動かし得ることが出來るもので、人間其の者が如何に學者であり、如何に大智恵者であり、又如何なる手腕力量家であつても、皆、黄金に依りて生存し得るものであるから、如何なる人物も黄金の力を去勢すれば、死に勝る大不幸の運命者となります。天下に美名を發し社會の人氣を一身に集めた大勢力家も黄金の種が盡きると同時に、世人は犬の子の死せしほどにも感じないのが普通である。人世は黄金萬能を以て社會形成の本體を成すものであり、古來黄金力は天下を取る實力が具備されてゐるのであつて、社會の構成は黄金の力に因るものなりとの一片の理論も立つ次第であります。斯くて黄金力の増減又は黄金の生死運命は、各人の住宅の西方一局部分に存在するものであるから、**この方位と家相に就いては、特に深甚なる研究を必要とする譯であります。**

金錢上の紛爭は西缺け也

西方『缺込み』は、金苦の家相と云つて、人間一生金錢に惱み、苦しみ、金錢の爲めには親子不和合となり、兄弟は敵となり、味方たるべき夫婦仲は離婚となり、遂に一家は破滅の運命を招來するのであります。

『缺け込み』凶相にて金苦に惱む者の性格は遂に馬鹿に化し無法者となる。不仁不義を行ふを良心に恥ぢず全く人の質が惡くなりますから、世人は其の人を自然に遠避ける。從つて其の人は世の助けを受る事が出來ぬから、益々信用が死し最後に至つて黄金の爲めに牢獄の難を受くるのであります。勢ひ西方兌金の損害重なり來つて處世上の金苦甚だしきを感ずる。是に對應して無理に漕ぎ付けんとしても、最後には進退谷まつて遂に其の家を立退き、或は借金と不義理とを殘して、夜逃げ同樣に行衞不明の人となるのであります。

西方兌の『缺け込み』は坎の一白となる。兌に一爻不足するの象あり、卽ち、『缺け』

るとは有る量が無くなる理にして、宅主の本命星が西方に巡りたる歳に遭遇すれば、夫れより家運の勢力と金力が缺け始まつて、年々月々缺けて行くのであるから、最後には出來得る限り手を延ばして借金製造を爲し、どうか家運挽回を爲さんとするも、眞劍味を失ひ表面眞面目らしく見せかけても、實に誠意を缺き嘘言を吐きて時の金融を爲さんとするものであります。

兌を金錢とし、口とし、又兌『缺け』て坎となる。即ち、坎を苦しみとするが故に金苦の爲め嘘言を吐き他人を愚弄する。又坎を交はりとするが故に、自分の發する言語は彼と交はり、其の嘘言は事實を裝うて一時的の效果を奏して金作自由に行はれる象があるから、自分の言語は彼に交はり彼の金圓は我が懷中に交はり入るの理あり。即ち、坎を交はりとする所以であります。

又坎の裏は『離火』。離を見るとす。離を現はれるとす。我が嘘言を發せし事は、他日現はれて紛爭と化する。離を爭ひとす、又離を分れ離れるとす。然る故に彼我互に精神離反して、最初の嘘言は最後に明かとなり、現はれて離別絶交となる。又坎を陷るとし、是苦境に陷つて離の公爭公難と化する爲め、遂には金錢上の問題が原因となつて餘儀なく牢獄の憂目に遭ふに至るのである。坎を夜とし、暗きとす、身を暗中に投じられて坎の惱みを招くに至るのであります。西方『缺込み』の凶相は右に述べる通りであるが、尚ほ今一歩進めば獄中を出でたる後に至り、全身的に冷る爲め病災を發生する。坎を冷とし、又病災とするが故に、出獄後は病體となつて流浪するに至る。坎を流水とするから先から先へ流れ行く意にして、人世社會に流浪して流れ行くの斷あり。即ち、永住せる土地を離れて他郷に流れ行くの象あり、最後は地中に沒する運命となる。坎を病死水死とし、又坎を穴とし陷るとする理に因つて、病氣全快に至らずして死するの斷となるのであります。

西缺けに於て成功が極惡

後天定位に於ける坎位一白は先天定位に於ける北方二黑とす。即ち、坎の穴は地中にあり、此の穴に陷るの斷となるのであります。地面上方寸内に數千の穴ありと云

ふ。斯くの如く、坎を穴とす又穴に陥るの斷あれば、金苦に惱み嘘言を發して、遂に金錢を得最後に公爭公難を發生して牢獄の憂目に遭ふ。併も出獄後は病身となつて、西『缺け』凶相の住宅を退きて坎水の如く流浪の末、病死水死を遂げて地中に沒するの斷となります。

西方『缺込み』の凶相に住居しても、最初の十年間の內には必ず一度の成功期に遭遇して、華々しく美麗なる生活狀態を呈するのであるが、永續性が甚だ乏しい。一端盛況の後家主の本命星が西方『缺込み』の方に巡りたる歲より、著しく逆境の運命に變化し、其の變化は最終迄惡化して行くのである。故に、家相鑑定法としては必ず二十年間を一期と定め、此の一期間內に置いて最初は成功し得るのであつて、其の時代の旺盛期は常識眼を以て見れば、必ず永續性あるかの如く感ずるのであるが、其の觀測は必ず用ゐてはならぬ。

尙ほ西方に家主の命星が巡る歲を擧ぐれば、左の通であります。

二十一歲。三十歲。三十九歲。四十八歲。五十七歲。六十六歲。七十五歲。

八十四歲。九十三歲。

西方の『缺込み』の家相に住居して、右の年齡に達したる歲より家運の逆境を實現し、其の後五ヶ年にして家運は死滅するのである。**何れにしても西『缺け』凶相の家に住居した其の年より二十年內に成功したり、潰れたりすると云ふ陰陽兩道の盛衰を免れないのであります。**

先天後天共に西方は惱み

先天定位に於ける西方は一白にして坎を陥るなりと言ふ。西方は陥り沒するのが天地の大法であり、また是が本義となつてゐます。東方より登天する太陽は、南方を經て西山に沒するのが天地の大法であつて、何等疑ふべき餘地はない。太陽の西沒は其の日の終りにして、終局を指すのであります。後天定位の西方七赤は、西方吉相の家相に住居して始めて働くのであつて、反對に住宅の西方が『缺込み』の凶相なれば、其の七赤は坎の一白になります。**然る時は、先天の一白と、後天の七赤が變化して一**

白となつて同會するから、西方は先天も坎、後天も坎となる。即ち、一白と一白が相重なる事となるので、惱みが重加する。易に曰く坎を惱みとする所以にして、家運と身體との兩方に病災を招き、遂に家運も身體も死するの斷にして、世に浮び出ずること能はざる理合ひになります。

西方『缺込み』の凶相に生れたる子供は先天的の不健康にして、身體は細く瘦せ一見弱體を現はしてゐる。其の理は西方兌を右肺とし、其の肺の力が一爻不足して小さい。從つて呼吸する力が弱い爲めに、消化機全體の活動能力を弱むる結果となり、動もすれば消化不良に陷り、常に不健康であるが故に、短命なるを免れないのである。持病としては肋膜炎、胃腸不消化病、老後に發生する胃腸喘息咳等の病氣を生れながら有つてゐるのであります。是は消化力の弱き爲めに、榮養の吸收力が乏しいので肥滿した人物にはなれないのであります。兌を陰とし、陰は小にして全身瘦せたる小供が成育される。肺の活力弱きは血液製造力の底下を物語るものであつて、動もすると貧血症を發する。此の貧血性は四百四病を發生する原因となる。貧血は西方先天の一白にして坎を血とす、此の西方『缺込み』たる相理上血の不足を生ずるのである。又坎を冷とすれば寒氣の刺戟を受くる事甚だ大にして、是又惱みとする所以んである。又坎を中年とすれば、三十歳前後より坎の病災に罹るの斷あり。坎を中年とし、坎を病災とする。此の病災は概ね死病とする。然ざれば長病に惱む事となります。

先天定位に於ける兌位の一白は、後天定位に於て北方の一白となるのである。即ち、坎の穴は先天北方の二黑の地中にあるが故は、北方は死方となるの義である。釋尊は死體に對して頭北西面を説かれた。人が死すれば必ず北方に頭部を向け、南方に兩足を流座せしむる。是を以て死者を寢かすべき正法とされてゐる。南方は陽方にして生者の向ふべき方位であるが、死者は北枕と定められてゐる。人が死すれば直ちに『枕直し』と稱して必ず北方へ頭部を向けるのを正法とされてゐる。南方午の刻は日中にして太陽が天に冲するの時、北方の子の刻は夜半十二時にして陰極の方位なれば、死を陰として冥闇の理より必ず此方へ頭部を向けるのが古來の習慣となり正法となつたものであります。

人は南面に生きる。日中活動するは南方の作用にして、夜寢に就くは北方の作用であります。晝夜陰陽の區別ある所以なるべし。晝は陽にして、夜は陰なり、是を又陰陽に分くれば午前六時より正十二時迄を陽の時刻とし、正十二時一秒より午後六時迄を陰の時刻と定められて居る。

先天後天ともに坎の一白は死を意味します。西方『缺込み』は先天後天ともに坎の一白で人が死するのは西方に當るのであります。地中に死體を埋葬するのは北方に當り、其の地中に埋める穴の深さは六尺餘を以て定法とされてゐる。死者を入棺すべき箱は横二尺に深さ四尺を定法とされてゐるのは、穴の數を本體として決すべきものである。坎の一白には一と六の數あり、一は生數にして六は死後となる。六の數は活動旺んなる數にして、大いに振ふの理あり、是旺んなる者は必ず亡ぶと謂ふ眞理に基くのであつて、生があるから死が起る。然る故に六數は死數となるの原理あり、**死とは氣體の分るゝを謂ふので、肉體と『氣』と分離せしを指して人の死と名付くるのであります。**體内に『氣』を保つを指して生と謂ふ。氣體一にして活動するを生存と名付

くる。『氣』が肉體内を去つて天に歸すれば死體と化するのであります。

家相は人間生活を支配す

『氣』は形に抱擁されて確立して居るのであるから、吾々の肉體から吾々の精神である『氣』が、吾々の肉體から去つて昇天すれば、吾々の肉體は死體となつて仕舞ふのであります。『家相』は是と同じ理窟のものでありますから、此の根本觀念を徹底的に理解しないと、『家相』の眞の鑑定は出來ないのであります。即ち、『家相』とは家と云ふ建物の中に抱擁されてゐる處の『相』を指して謂ふのであります。だから家そのものは死物同樣であるけれども、其の家と謂ふ建築物の中に天地の『相』が充滿して居る爲めに、『家相』が生きて居るのであります。是だけの説明では十分御理解が行かないかも知れませぬが、兎に角も『家相』は生きて居ります。其の生きて居る『家相』は、其の『家相』内に住居して居る吾々の『肉體』及び『思想』と密接不離の關係にあります。否、『家相』と『思想』とは異名同體のものと謂ふてもよいのであります。

即ち、其の生きて四六時中活動を續けて居る處の『家相』を、人間が勝手や都合で雜作したり改築したりする事は、丁度、吾々の手や足を切斷したのと同じ結果を招くのであります。吾々の手や足が一度切斷されたとなると、再び手や足の働きを爲さず不具者となる事は謂ふまでもありません。斯の眞理が解れば『家相』に對する觀念が自ら氷解される事と信じます。此の意味に於て『家相』を研究して行く時、首めて科學的にも精神的にも『家相』の眞意義を發見し得ると共に『家相』其のものは、吾々の生活を支配するものであつて、斷じて迷信でない事が明瞭となるのであります。

――（前編了）――

家相奧傳講義　西之巻　後編

家相とは如何なることか

これまで家相の事については、講演竝に講義錄に於てかい抓んでの説明はして來ましたが、徹底した説明は致しませんでした。これが爲め本支部の會員竝に一般講義錄の讀者諸賢は、方位のことはよく判りましても、家相については徹底して居ない憾みが多々ありますので、今回更めて家相專門の講義を致す事になつた次第であります。

從來、家相と言へば家の構造――即ち家の恰好を以て判斷されて居つたやうであります。家の構造は家相判斷上の一資料には相違ありませぬが、是を以て家相全般の基本的資料とはなりませぬ。家相は文字の示す如く『家の相』であつて、『相』とは形な

く目に見えないもので、天地の氣であります。卽ち、家の中に充滿して居る處の『**氣**』そのものの相を指して家相と謂ふのであります。從つて普通の家相見の鑑定は判斷の根柢に大きな間違ひがあるのでありますから、大抵間違ふ方が當然であると言はなければなりませぬ。

然し、『**相**』の活きた働きを基調として判定する時は、其處に吾々人間の常識を差し狹む事なく、全く天地の眞理に基くのでありますから、間違ふ方が不思議で判斷の正當なのが當然な次第であります。と言ふのも、家相は吾々人間の思想を作り、其の思想に基ゐて吾々は四六時中活動するものでありますから、其の思想の善惡を創造してゐる處の家相の眞理を抽出して、判定するからであります。だから家相の眞理は家の內に充滿して絕えず活動してゐる處の天地の『**氣**』である事に重點を置いて、研究を進めて行かねばなりませぬ。從つて眞に間違ひない鑑定を行ふ爲めには、一片の圖面だけでは駄目で、實際住居されて居る家屋の內外を詳細調査した上でなければ斷定出來難いのであります。卽ち、外側から見れば如何にも『**張り**』のやうに見えて居つても、壁が厚い爲めに『**張り**』になつて居らず、或は反對にそれが『**缺け**』になつて居つたりするからであります。家の恰好を以て判定するのであれば、さう云ふ面倒はないけれども、前にも申しました通り、家相は天地の氣でありますから、壁のつけ方が僅か五分か一寸位外側に出て居るか、それとも內側に入つて居るかに因つて、其の家に住居する人々の運勢に異常な變化を來して居るからであります。

それ程に家相上の鑑定は六ヶ敷いのでありますが、以上の眞理を能く納得された上これから述べる講義に就いて十二分の御理解を願ひたい次第であります。

家相の骨子は何所にある

家相は御承知の通り、『張り』、『缺け』が大體の骨子をなすものである事を第一番に御承知を願ひたい。**『張出し』となつてゐるのが吉相で、『缺込み』になつてゐるのが凶相である。吉凶の岐るゝ所は卽ちこの二つであります。**

故に、家相は總て『張出し』を以て吉相とし、『缺け』込みを以て凶相とする。この

骨子を第一として、内容を第二とするのであります。内容を第二とするといふ事はどういふ事かといふと、例へば西の方に梯子段があるとか或は東の方に炊事場があるとか、それ等の細々した吉凶を論ずる事は『用』となるからであります。家相の最も重要點となる事は、家の『缺け』、『張り』。これが第一で根本の『體』となつてゐるからであります。卽ちこの缺け張りの吉凶はその家運の死活を司るもので、繁榮も滅亡もそれによつて發生し、又全家族の生死も、必ずこれに依つて支配されるものであるといふ事になつて居ります。

されば如何に吉方に行きましても、家相の力に依つて發生する病氣であれば、その死する事を防ぐ事は出來ない。詰り、天地の法の力を以て防禦する事が出來なく、家相の偉力は實に方位の力に優るものであります。便宜上玆に人の運命を支配する力の強弱を比較檢討して見ますと、その順序は次の通りになります。

一、地相

二、家相

三、方位

四、運勢

斯ういふ事になつて居ります。

世の中には「あゝいふ立派な運を持つた人が、どうしてあゝいふ所の小使をするやうになつたんだらう「あんな好い運の下に生れた人がどうして玄關番などして生活して居るんだらう」斯ういふ事は屢々吾々の見聞する所でありますが、人間の運勢などは好くつても惡くつても、それは大局上大した問題ではない。生れた年月の星が如何に幸運であつても、また惡運であつても何んにもならない。如何に大幸運の者であつても暗劍殺へ移轉すればその人の命は終る。惡い運の人も同じく暗劍殺の凶方を犯せばその命を失ふ。して見れば凶方の前には幸運の人も不運の人も全く同じ立場に置かれ、運の善し惡しは問題にならなくなる。唯死するといふ時期が多少遲速の差を生ずるだけで、今月死ぬものが來月に延びたといふだけのこと、いづれにしても斷じて死する事は免れないのであります。

右の說明で明かなる如く、自運卽ち持つて生れた運勢の善し惡しは殆ど問題にならず、先ず方位によつて左右され、更に家相に依つて支配され、更に又地相に依つて動かされるのである。といふ事になるのであります。人の運勢などといふものは日傭取りをして居やうと金貸しをしやうと、幸運に向つたといふ事になれば四年半は必ず良い方に向つて進む。これは自運の働きで誰彼れを問はない。四年半は如何に幸運だといつても家相の惡い家に長く居てはいけない。幸運時代の四年半を過ぎれば次は衰運時代の四年半を迎へねばなりません。その時になると自運が惡い上に、家相の惡いのも利いて來る。十年で溜めた財產も二年か三年で綺麗に叩いて仕舞ふのでありますから、順序から言へば一番弱いのが運勢、次に方位、次に家相、一番强力なのが地相といふ四段の構へになるのであります。

方位が判り家相の事を識ればそれで先づ十分である。また地相については、今日まで恰も人が鰻屋の前を通つてその匂ひを嗅いだ位の程度で、本當に好く嚙んで味はつたものは一人もない。從つて地相に重點を置かない人が多いけれども、地相を檢討すれば實に捨て置けない重大性があるのであります。けれどもその前に先づ家相を十分に知る事が必要であるので、序を逐うて家相の說明を試みたいと思ふのであります。

家相の眞意義を理解せよ

一體『相』といふものはこれまでも說明した事がありますが、形が無くて目に見えない天地の『氣』で、これを『相』といふのである。机とか、電燈とか、形が目の前に現はれて居るものは『物』である。『相』は目に見えず、人間の五感に感じないものであるから、人間としては知る事が出來ないから判らない。併し、**『相』は形はないが形に附隨して確立して居るものであります**。故に、家といふ『物』があればそこには立派に『相』があり、この家相の吉凶が一家の盛衰、家人の運命に重大な作用を及ぼす事は實に思議の外であり、恐るべき力を持つて居るのであります。

これを更に細かく說明すれば、家の眞ン中に磁石を振つて見て卯の方三十度の圈內これを指して東方といひますが、その東方が玄關になつて居る、東に口がある、缺け

込み、張り出しがある、或は泉水がある、築山がある、川がある、井戸があるといふ事については、悉くその吉凶が太極に響いて、家相の精神に吉凶の働きを生ずるのであります。東方三十度の圏内にある雑作の如何其の他に依つてその『相』が異つて居るが、兎に角も其等の『相』が働いて來る事になる。東には三碧といふ強い『相』が働いて居るのでありますが人間には見えない、『張り出し』とか、『缺け』た形などは人間の目にはよく見えますが、その形の中に抱擁されて居る天地の『相』は、決して人間の肉眼に見る事の出來ないものであります。見る事は出來ないけれども、『相』は力強く働いて居るのであります。

大體天地には東には東、南には南、西には西、北には北といふ各々の『相』があつて、萬物の消長、生成を掌つて居るのであります。**即ち、東には震といふ相があり、發育するといふ事が震の相であります。西の方はどうだといふと、兌と云ふ相があり實るといふ事、實がなるのであります。**人間の希望は實るより外にない。天地の生類といふものは實を得る以外に希望といふものがない。草が芽を出したといつても、それは發育して行つて、最後に花を咲かせて、實をならせるといふのが終局の大望であり使命であります。稻が生えた、麥が出たといつても總て五穀が芽を出したといふ希望を聞いて見ると、最後に於て實を生ずる事、これが終局の目的であります。

東といふ方位は發育の方位。西といふ方位は實を結ぶ方位。即ち新芽は東に發育して西に結實する。これが圓滿に取運びが出來ればその希望、目的、使命を果し得た譯で、非常な悦びでなければなりません。實が生つた悦び、大望を達した悦びが西方そのものである。故に、西方兌を「兌び」とすといつてある。「悦び」は人間の喜びであるが、西方の「兌び」は天地の喜びである。天地には心がないから「兌」の字を使ひ人間は心があつて喜ぶから「悦」の字を用ひてあるのであります。

斯くの如く東西南北各々獨自の『相』があり、特性があり、作用があるのでありますが、この天地の作用は直ちに一軒の家に移して以てその家相の吉凶を斷ずる事が出來る。天地といふものを大きな一軒の家に設へて、それを極く小さくしたものが人間の家だ。故に、東方の缺け込んだ家相は發育しない家、西に缺點のある家は實りの悦

びのない家相といふ事になります。

西方位張り缺けの重大性

先づ最初に專ら西の方位に關係した家相について申上げます。西は前述の通り生類が終局の希望を達成して喜ぶ方位でありますから、人々が有終の美を濟さんとすれば是非西方吉相の家に關心を拂ふべきだと信じます。

西方兌を秋とするといつてありますが、萬物は秋に於て實るのが原則となつて居ます。八月九日から初めて秋といふ氣候になり十一月八日までの九十日間が秋、この秋を指して西方の兌といふ。兌をよろこびとするといふ事は前に述べた通りであります。

一軒の家の中央から見て西の方位は秋に當り、西方凶相の家相はこの秋が潰れて居るから實らない。商賣は忙がしいが金が溜らない、詰り收入に對して支出の方が多いから、終りの喜びがない家相であります。營業が忙がしいのは結構だが、併し、人間は働く事それのみが目的ではない。兌の七赤の金錢を得るといふ事が希望であり目的になつて居ります。金錢の喜びの伴はない營業は無駄骨だ。併し西の方が『缺け』て居る家相には斷じて實が生らない。反對に西方の『張り』の家相には必ず金錢の悦びがある事になつて居ります。

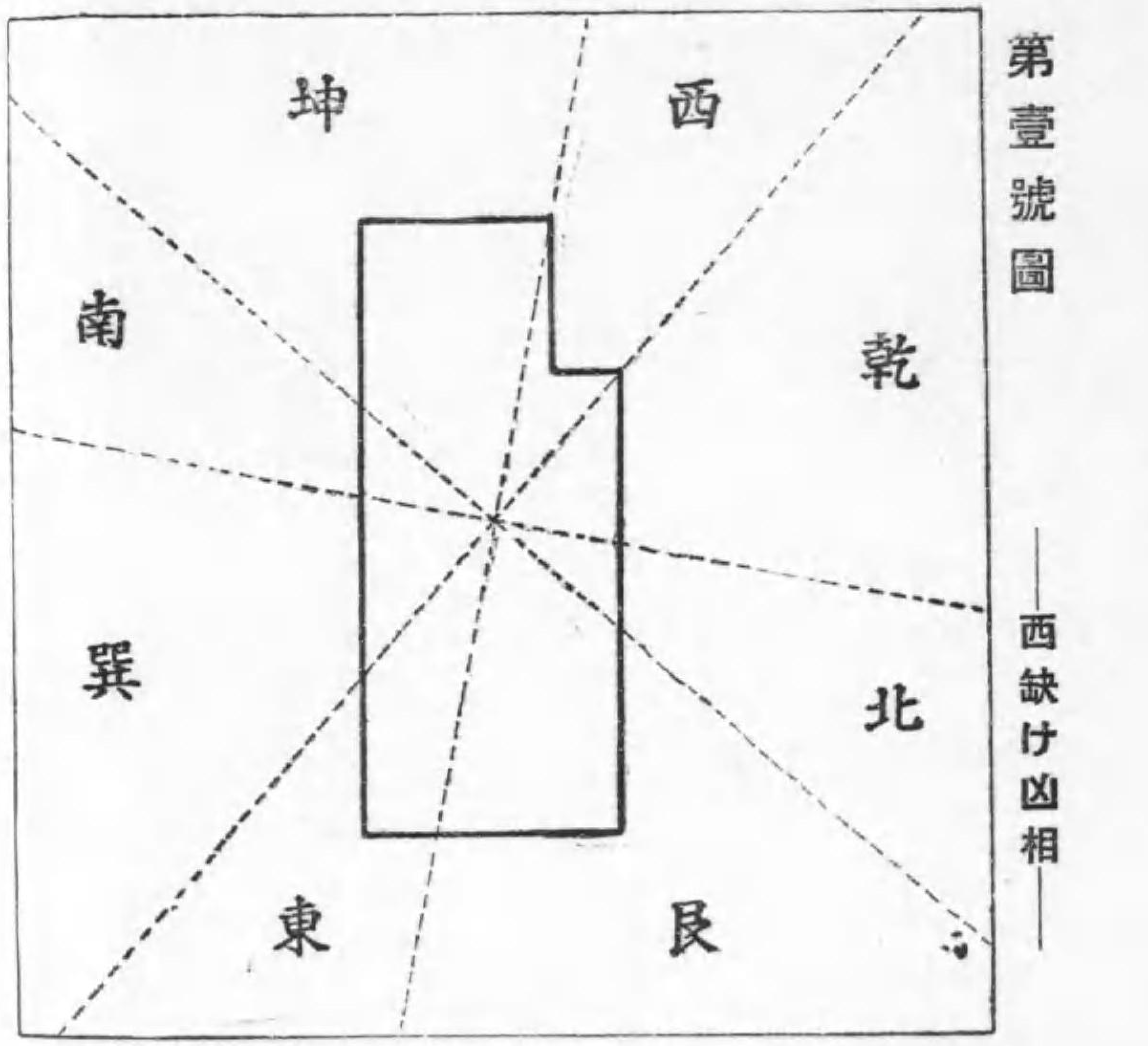
西方凶相の慘禍する由來

第一號圖は西の方が『缺け』込んで居りますから、西方『缺け』込みの凶相であります。それで若しこの家相の家に人が生れたとすると、それは必ずしも五十の坂を越えて零落する運命を持つた人で、この人の兄弟が幾人あつても皆同じ運命を辿り、老後零落するのであります。若い時代に百萬の富があつても五十から六十となり七十となつて、年をとればとる程零落し小使にも使ひ手がない、最後の果てには養老院に行かなければならない逆遇の人となるのであります。西の方は人生の終りであるから、終りを完ふする事が出來ない、五十歲以前に如何に財産が澤山出來たといつても五十五歲、六十歲になると段々貧乏になつて食ふ物もなく、家もなく、賴る親類もな

いといふ結果になつて、養老院のお世話にならねば自分の生命を維持する事が出來ない境涯に到達する。これが西の凶相であります。

　而してこれは何の生れ、何の星を問はずこの凶相の家に生れたものは悉くこの運命に陷るのであります。九紫でも三碧でも四綠でもその星を論せず如何なる人が生れても老後の零落は絶對に防ぐ事は出來ません。

第壹號圖　——西缺け凶相——



世の中には金寶よりも子寶といつて、子供のある人は幸福とされて居ますが、この凶相があつては子供があつて却つて不幸に陷る、子故に泣きの涙の日を送る人が多い。卽ち長い間に子供は病氣になつて死んだり生きたりする、監獄に行く者が出來る、不良兒になつて親に散々不孝して親の首に繩を掛けるやうな事を仕出かして來る。されば西『缺け』の家に住居してゐる人は子供の無い方が寧ろ幸福であるといふ事になる。世にも不幸な目に會ふのは斯ういふ家に生れた人の事で、これを檢討して見ると、家相は實に恐ろしいものであると同時に斯の様な家相に住居する人々は十人が十人、百人が百人、みんな沒落して行くのである。

　併し乍ら第一圖のやうに缺けて居つても、若し他の方に非常な吉相があるといふ事になると、その吉相のために一旦運勢は非常に向上して成金的の成功を爲し何萬の金が出來る場合もあるが、假りに其の成功があつたとしても五十歳から先は矢張り零落の一方で、長生する程零落して行く憐むべき運命の持主となるのでありますから、何人も現在の住居に就いて萬般の注意が肝要であります

肺の疾患發生は西缺け也

金が出來る出來んといふ事よりも、この凶相に於ては子供の中で肺病に罹る者が出來、家相に依つて命を失ふ者が生ずる。西の方の凶相であるから、西に最も因縁の深い七赤星又は酉年酉月生れの者が肺病に罹るといふ結果を生むのであります。

家相を見る場合には、必ず後天定位を基調として鑑定すべき事を忘れてはならぬ。卽ち、年々歳々運行する各星に重點を置く時は、飛んでもない間違ひを起すから特に注意し、運行星は結果を判定するのであるから、家相の基本鑑定に於ては決して是を用ゐてはならんのであります。後天定位に於てい西は七赤金星の方位でありますからこの家に生れた七赤金星の子、若くは兌を秋とするが故に、西『缺け』の家で秋に生れた者は必ず肺病に罹つて夭死をする。途中からこの家に越して來たものは違ふが、この凶相の家に生れて育つたもの、或はこゝで生れて滿三年發育したといふ事になると、その家からどこに移轉してもこの家相の凶災で死ぬ事は防げない、必ず肺病が起

るのであります。

その病ひの起る事の遲いと速いとは生れた子の月を以て判斷する事。年から行けば西の方であるから七赤の人がこの家に生れたといふ事になれば、必ず肺に依つて命を失ふ事は仕方がありませんが、何月生れといふ事を聞いて、若し秋に生れた子供があれば、秋は酉を以て中心とする、又西方を酉の方といつてある。この酉の方が缺けて居る事は秋生れの子供に取つて、自分の生命が缺けて居るのであるから、早く死ぬといふ事になります。兌を肺とするが故に、七赤の肺病に依つて殪れる事になる。

それでいつになつて肺病に罹るかといへば七赤の月に生れた子であれば、七赤の星が西の方に廻つた年の二タ廻り目、生れてから二タ廻り目に本命が西に廻つた時に起る。假に七赤の年の一白の月にこの西方凶相の家に生れた人があると、この一白が乾に行き、更に西に廻る、初めて西に廻つた年は何んともないが、それから十年經つて二度目に西に廻つたといふ事になるとそれが起る。また生れた年の星が西に廻つて起る人もある。そこに幾年か間隔を生ずるが唯その人の本命が二度目に西の方の『缺け』

に廻つた年が來れば肺病が起るといふ事を知つて居ればよい。

二度目に西に廻つて起らなければ、少し遲れて中央に入つた年に來る。生れた月の星、生れた年の星この二つをよく見て、そのどつちかが中央に入つた年に病氣が起るものと鑑定してよい。年月いづれの星が中央に入つてもこの凶相の作用を受けて死病を發するに至るのであります。十人のものは先づ七人までは中央に入つた年に起る。つまり生れた月、或は生れた年の星が二タ廻り目に西に廻つた時に起るものと、年月の本命星が二度目に中央に入つた年に必ず肺病が起ると斷定してよいのであります。

鑑定の上に現れたる實例

大正八年九月生れの人。この人は昭和十一年は十八歳である。而してこれは九紫の年七赤中宮の酉の月の生れであります。この人がこの凶相の家に生れたとすると、西方酉の方に、これだけの『缺け』込みがあるのだから、この人の肺は生れながら小さく弱く出來て、瘦せた子になつて居ります。九紫中宮の時は七赤が東に居る、それから二年目は巽、三年目には中央に入る、四年目は乾、五年目に西に入る、この五年目にはまだ死ぬ事はない、今九ケ年經つて二度目に西に廻つて來た時には最早如何とも致し難いのであります。必ず肺病が起るといふ事は、これは如何に吉方を使つてもこれを防ぐといふ事は容易に出來ないのであります。

茲に於て私は家相から來た病ひに向つては、決して防禦に掛つてはいけないといふ事を幾度も繰返して御注意申上げてゐる次第で、これには私自身が幾度懲りて居るかわからんのであります。「癒る〳〵といふものだから幾度も方替をしたのにとう〳〵死んでしまつた、方位なんて當てにならん」斯ういふものが出來てくる。折角誠意を以て骨を折つてやつたのに、このために感情を惡くして往つたり來たりしないやうな事が出來てくる。この實例が數限りなくある、骨を折つて惡く言はれるやうな結果になるのであります。

斯くの如く、如何に大事な子供であつても身體を持つて行かれるやうな事が出來るのでありますから、二タ廻り目といふ事をよく記憶して置かなければなりません。そ

こで若し二タ廻り目を凌いだといふ事になると九紫が來るか、七赤が來るか、どつちにしてもこれが中央に入つた年に發病する。茲に注意して置きたいのは、**その年といふ事はその翌年の五月六日までを指す**、**九紫中宮の年といつても、翌年の八白中宮の年の春一杯を含み、翌年五月五日までを前年の分として見るのであります**。この場合病ひは前の年に既に生れて萠して居る、その芽が春になつて發育するといふ順序になるのであつて病ひは前年のうちに立派に發生して居るのだ。この要點をよく記憶して置かねばならぬ。

本命が中央に入つた時に發病するものは死病だ。素人はどういふ譯か理窟は知らないのであるが自然的な體驗の結果よく斯ういふ事を言つて居ますが、本命が中央に入つて起つた病氣は癒らない、確かに死ぬのであります。人間は五臟の働きによつて生きて居る。五臟は卽ち中央、この中央に人の本命が入つた時は最も五臟の活動の能力が能くなる、活動する程度が強くなる譯であります。然るに五臟のうちの肺臟が一つ弱つて居る、或は缺陷を持つて居る時にはあとの四臟の旺盛な活動に蹤いて行けない。

千丈の堤も蟻の一穴から崩れる如く、一つの綻びは遂に全體の致命的打擊となつてしまふ。かるが故に本命が中央に入つても、西へ廻つても死する事は免れないのであります。

西『缺け』の家に生れて五歲なら五歲までこの家に成長した者は、最早家相に依つてその者の一生涯の運命は決定されたといつてもよろしいのであつて、外に移轉しても、藏のある家に住んでも凶相に依る凶禍は防げないのであります。生れた家の家相といふものはこの位強い力を持つて居るのであります。

金の出來ない西缺け家相

營業は相當に繁昌して居るやうに見えても、西『缺け』の家は金が無い。西『缺け』の家に住んで商賣をしたらどういふ結果になるかといふと、これは兌のよろこびが『缺け』込んで居る爲めに、商賣が如何に忙がしくつても金が出來ないのであります。結局この家を擔保にして金を借りるやうになる、それを濟さないうちに又金が入用にな

つてヒドイ工面をする。終りには借金と命の二つを持つてこの家を立退くといふ時代が必ず來る事になるのであります。然らば何年何月さういふ事になるかといふに、そこの主人の本命が西の方に廻つた年から先へ行つて向ふ四ケ年のうちに、そこを立退かなければならない鑑定になるのであります。

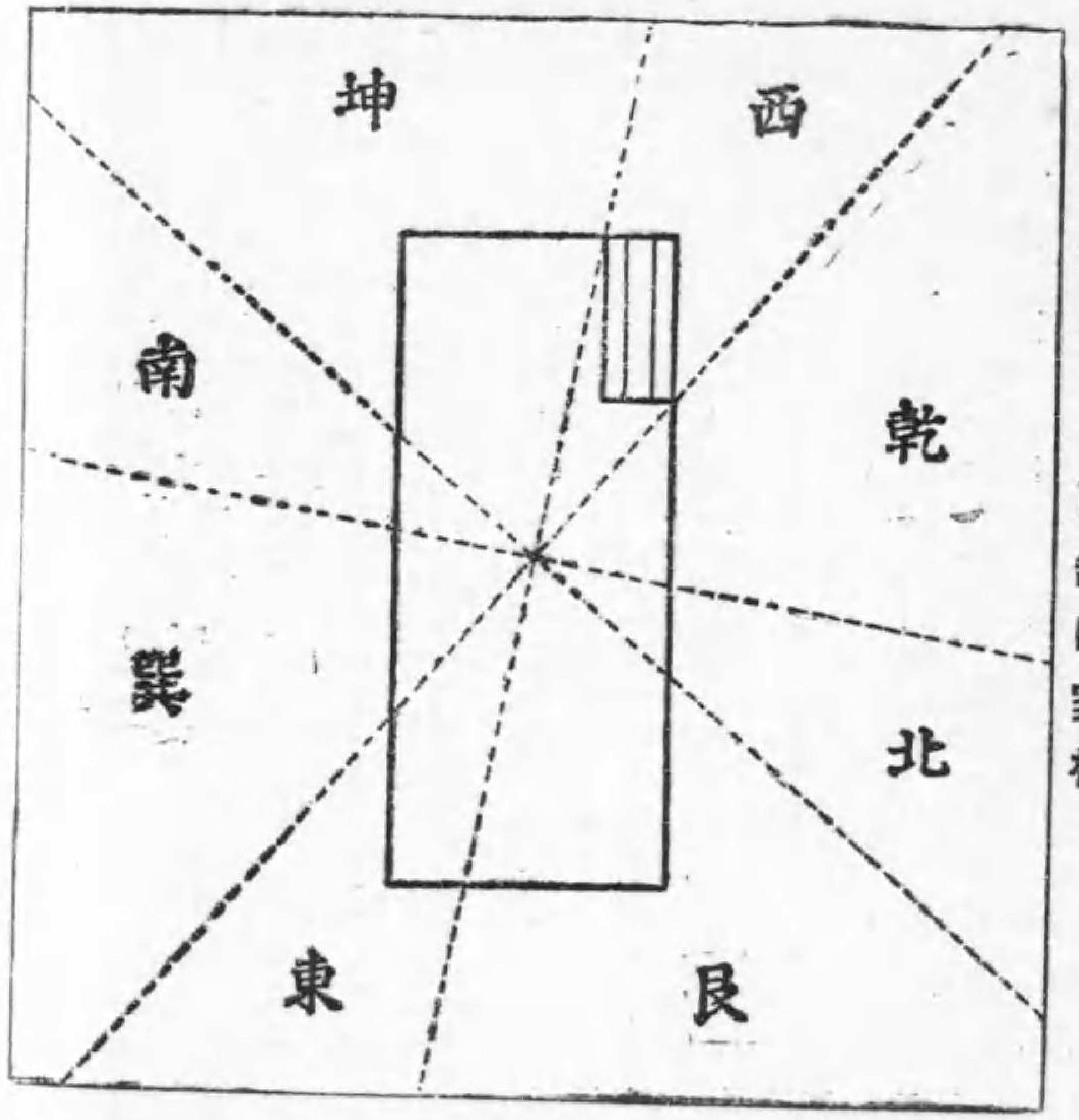
總て家相より生ずる作用の結果は、年盤を標準とする事。年盤を標準として向ふ四ケ年といふと、本年は昭和十一年でありますから、十二年、十三年、十四年一杯には絶對にこゝを立退かねばならないやうになる。否應なしに追出されてしまふといふ時代が必ず來るから、早く用意をしなければなりません。尤も結果は用意しても用意しなくつても同じ事、これはどうしても避け得られない。この家に住んでから二年目か三年目に本命星が西に入つた時はまだ家相がよく働いて居らないので、運の好い方が働きますから金の廻りも惡くはないが、九ケ年先へ行つて二度目に西に入つた時には全く仕方がない、どうしても百人が百人、千軒が千軒みんな同じ末路を辿る事になるのであります。大抵は二度目の廻りまで持ちません。持ち耐へて三度目の廻りまで持つたといふ家はない。必ず二度目、或はそれより早く沒落するのであります。

總て西の方の『缺け』の家に七赤の子供があつたら必ず不良になる、酉年に生れたものも必ず不良になる、一家を持つた人は金が無くて年中金に苦しむといふ金苦の家相であります。總て人の目的たる有終の美を成さず、正反對の結果に泣かねばならぬ凶相の家であります。

西方廊下の凶相は如何に

これを圖面で見ては第一號圖のやうに缺込んで居ない、併し、矢張りこれを『缺け』と見るのであります。酉の月に生れた子は死なゝいかといふと結果に於ては大體同じだ。老年に至つて乞食になるといふ事も違はない。たゞ第一號圖に於ては西が全く、『缺け』て居るのに、この第二號圖に於ては兎も角障子があつて戸がついて居り戸締りがしてある。この家で生れた子供の肺の量がこれだけ大きい。これだけの肺の領分があるのだから必ずしも死ぬるとは定つて居ない。十人のうち十人死するといふ第一

第二號圖 ——西缺け家相——



號圖に比してこの家に於てば十人のうち六人は助かる死ぬ者より助かるものが多い。併し、肺病に罹るといふ事だけは間違ゐないのであります。唯それだけの相違であつて、あとの經濟上の事、世の中の交際の事、或は家庭の平和といふ點について滿足な結果の見られぬ事は第一號家相とちつとも變つて居ない。強ゐて相違點を見出せば第二號家相に於ては同じく金錢上の損害を被るにしても、儲けて一旦成功してから損をするやうになる。第一號家相に於ては儲けないうちに天づけ損に損を重ねる、これだけの差違がある。いづれにしても終りの喜びが缺けて居る、實がならないのであります。

第一號圖のやうに家の體の方が『缺け』て居るのと、第二號圖のやうに體の方が廊下になつて緣側になつて居るのとでは、其の作用も幾分相違がありますが、根本は變らないのであります。そして秋になると毎年毎年災難が來る事は共に同じであります。毎年八月九日から十一月八日までの間になると、いつの年でも無事に通れない、必ず災ひが來るのであります。

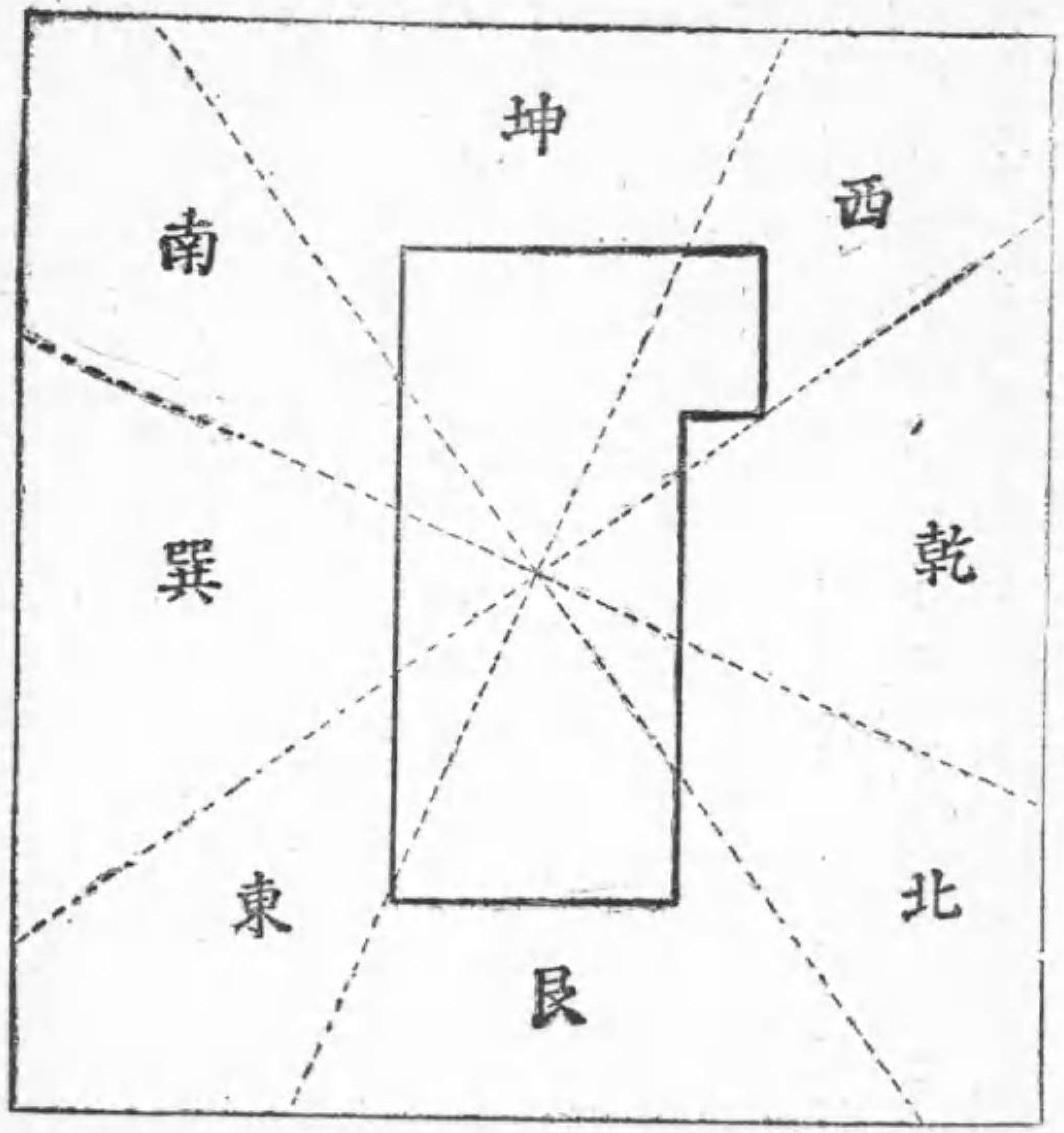
總て西といふ方位は七赤金星の方位でありますから、家の事を論ずるにも總て七赤の金を問題として鑑定する、金錢を以て根本體としてゐる。故に西の方に口があり、椽側があり、缺け込みがあるといふ事になると、如何に最初財産が出來ても最後には蹉躓沒落する、ここに生れたものは何の星を問はず終りには自分で自分の生活が出來なくなる、老後に於て零落必至の家相であります。殊に七赤中宮の月、或は七赤中宮

の年にこゝに生れた人は物を損するばかりでなく生命を損するといふ事になります。

西方兌を少女とす。少女についての缺陷も大に注意せねばなりません。よく聞く事でありますが、十六七歳の娘が晩方湯に行くとて單衣物を着たまゝ出て歸らない、或は友達の所へ行くといつて家を出てから八年になりますがまだ行方がわかりません。又は私共の娘が家出以來六年になりますが生きて居るでせうか、死んで居るでせうか斯ういふ質問をよく受けますが親心は誠に同情に餘りがある。これは親の不注意でも何んでもない。皆母屋の凶相から生んで出る所のもので、何十年經つても歸つて來ないと云ふ家出人は、東京に幾らあるか判らない。風につけ雨につけ年中親がそれを忘れないで泣いて居るといふ悲慘な結果もこの凶相によつて生れて居るのであります。

左圖は西『張り』の吉相であります。**西の張出しは六白金星を以て鑑定する。七赤を以て鑑定するんではない。西の方に『張出し』があると七赤が消えて乾の六白になる。乾を滿つるなり、旺んなりといひ、乾を動いて熄まざるの形とす。年中活動する**朝から晩までちつとも休みなしに年中動いて熄まず、年中働いて停滯する事がない。

第三號圖 ——張り出し吉相——



この家の細君がさういふ運命になるのであります。乾は主人、西は細君の方位でこの吉相の家に於ては細君が主人の代りになつて立派な働きをする、細君は女だが六白の男になつて働くのですから、所謂嬶天下の家相はこれであります。嬶天下の家相といふのは、主人がボンヤリしてゐて、細君の方が才もあり動きもあるといふ事を證明して居るの

であります。主人は營業方面でも役に立たない代りに細君が偉い、主人よりも細君の方が偉いためにあすこの家は出來て行くんだといふ事になります。

　西の方に斯ういふ『張出し』のある家相は必ず金が出來る。但し細君が死ねばそれが一つの災害であとはダラ／＼と家運も死に向ふ。故に此處の家には細君が大切だ。誰れが死んで好いといふ譯はないがこゝの家には細君が最も大切だ、營業も財政も家運も皆一身に背負つて働くのがこの家の細君で、別に敎育があるから偉いのではない、敎育なんぞちつとも用をなすものではない、敎育があつても無くても偉いおかみさんに出來上り、その資格がつくのである。故に主人もこの細君に一歩を讓つてその言ふ通りにする事が必要である。細君が物を澤山仕入れて置きたいと言つたらその通り仕入れたらよい、金を貸してはいけないと言つたら貸してはならぬ、娘を嫁にやらない方がよいと言つたら强ゐてそれに逆つてはならぬ。これは細君が利口だからといふのではない。そこは自然の運命で、細君の腦裡に感じて來る或るものがあつて、澤山仕入れたいと細君が言ひ出して買つたものはあとで必ず利益になる。金を貸したくないといふのに無理に出した金はあとで動きの取れぬやうな事になる。何事も細君の言ふ通りにして決して間違ひがなく、失敗がないのであります。

西張り家相の細君の實力

　西『張り』の家相では偉い細君が出來上る、この家では細君が非常に强い、だから雇人は細君の惡口を言つてこの家を出るやうな事になる。あのおかみさんのやうに八釜しい嚴重な人はない、こんな家で女中は出來ない、小僧奉公は出來ない、番頭は勤まらない、とおかみさんばかりを憎んで雇人が出るといふのがこの家相であります。細君の働きが如何にも强い、六白だから動いて熄まず、朝早くから夜遲くまで自分自ら働き通して實地のお手本を示す、自分が先に立つて働く、何事にも十分行屆く、とても橫着者や怠け者はこの家に居られない。然も西方七赤、兌を口とす、この口を以て雇人に嚴しい事を言ふ、目下のもの、卽ち東と巽、三碧四綠の木星の者に對して、七赤金星から金尅木と尅して年中小言を言つて居る。尅される雇人の方では年中氣に

入らない、そこで「おかみさんが八釜しくて居られない」といふので出る事になるのであります。

併し乍ら西方吉相の斯ういふ家においては、家族も雇人もよく細君の言ふ事を守る必要があります。又この細君が餘計な事をしやうと、馬鹿な事をしやうと間違つた事をしようと常識で見て良い惡いを言つてはいけない、終局に於ては必ず間違ひなく失敗なく良い結果を得るといふ事になるのであります。兎に角斯ういふ家相に於ては、細君の言ふ通りに實行するといふ事が一生涯の安定を保つ所以で、それを抑制したり、その意見に逆つては良い結果とはならない。若しこの細君が死んでしまへばそれがこの家の病ひでダラ〳〵貧乏になり、商賣は變る、他へ移轉する、家運は段々惡い一方に傾くといふ事になるのであります。

西は金の方位、兌びの方位、人に取つては細君と少女の方位。西『張り』は細君が偉いために金が澤山出來る、金の悦びが來る。併もその金錢の悦びは營業で働いて儲かるばかりかといふとさうぢやない。斯ういふ家になると、夢のやうに當てにしない只の纏つた金が入つて來る。まさか只の金が入つて來る譯はないと思ふが思ひ掛けない金が入つて來る。働いて貯金してその上に當てにしない金が入つて來るのでありますから十分悦びと滿足を得る家相で、第一號圖第二號圖の家相とは全然相反するもので、これが第三號圖の西方『張出し』の吉相の家であります。兎も角も第三號圖の如く、僅かな吉相であつても是だけの働きがあるのであるから、家相の作用が吾々に如何に重大なる働きを爲しつゝあるかを、實在の家に就いて能く納得せられたい。

家相鑑定上の基礎的資料

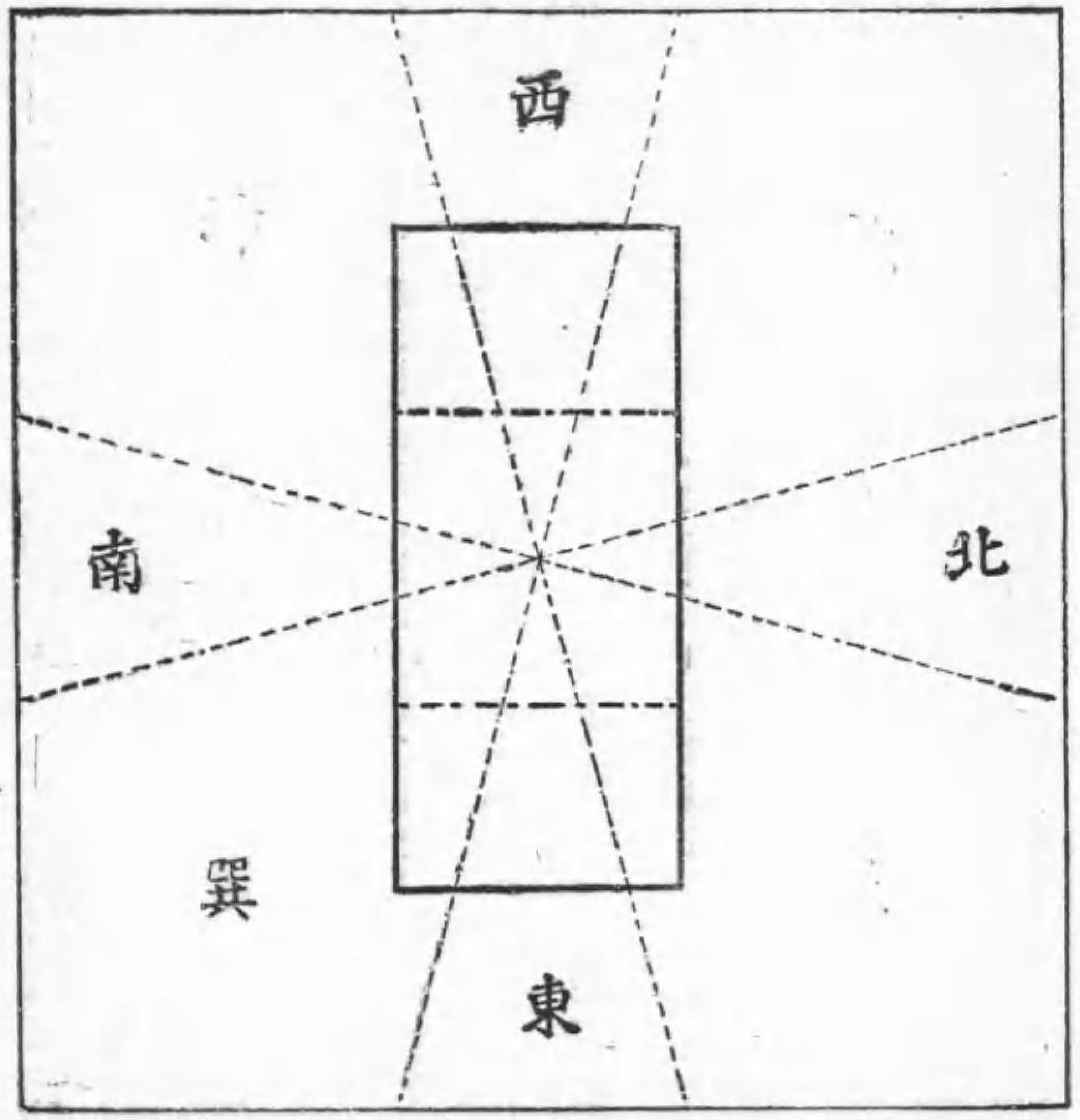
大正館發行の『方位明鑑』の中の先天盤を御覧になると七赤金星の爻があります。兌☱これが七赤であつて、家屋の西方に若し『張り』があると右七赤上部の陰爻が塞がつて乾☰の六白になります。卽ち、七赤の女變じて六白の男となり、動いて熄まさるの形、乾を六白とす、乾を施しとす、一家の細君が主人に代つて家のために熱誠を捧げて活躍するから、營業も隆盛に、家運も榮える。その理由は全く西方張出しの吉

相に依つて七赤が六白に變化した爲めに、細君が男の代りに活躍する事になるからである。この故に七赤を以つて判斷せず、六白金星を以て鑑定しなければならぬ事になるのであります。

震☳これは東の三碧の爻でありますが、東を震とす、震は進むなりで、東の方に『張出し』が出來ると一爻塞がつて兌☱の卦たる七赤に變じます。それで東の方に『張出し』があると營業が盛んになつて金が出來る家相となります。若し東の方が『缺け』て居ると坤☷の爻卽ち二黑となり、この家相にはこの通りの人間が生れる。東の『缺け』の家に生れた子供は必ず音聲が低い。普通に辯舌が働かない。震の三碧の聲が十分發揮する事が出來ない。震變じて坤の無になり土になるからであります。これが算木法で家相の『張り』『缺け』はこれを基礎として鑑定する事になるのでありますから、よく御記憶願ひたいと思ひます。

この第四號圖は同じく西方の『張り』であります。どうして西方の『張り』かといふと、この中心から見て點線の部分の間數が多い。點線から先きの部分が『張り』になります。同じ理由で東の方も『張出し』になつて居ります。家相の本體が『張出し』になつて居る處に留意しなければなりませぬ。

第四號圖



東西に『張り』があつて一見してよい家相に見えますが、これは俗に言ふ四二間の家相であります。**間口三間半、奥行八間あるこの家がどうして四二間かといふと、普通一般に唱へられてゐる間口二間に奥行四間**

だから四二間といふのは間違ひて、それは天地の眞理を知らないからそんな事を謂ふのであります。詰り、間數は問題でなく、その『相』を指して言ふのであります。從つて間口や奥行は問題でなく、その一つの形即ち長方形の構造を指してこれを四二間といふのであります。

この見地から第四號家相は立派な四二間だ。併し『張り』には張りだけの働きがあつて、一旦は財産が出來て榮えることもあるが、それは最初の十年間であつて、次の十年間には必ず滅亡する。『これは二十年鑑定法』の一例であります、恐らく二十年は持たない家であります。四二間といふ家相はどうして惡いかといふに、この第四號家相の如きは天づけキチンと整つて居て欠點がなく、『欠け込み』がない。東西の兩方が張り、體が張つて居るから吉相だ。故に一旦は成功してもその吉が變じて凶となり、必ず潰れるといふ事になる。これが四二間の特徴で、本當の意味の張出しもなく、物置もなく、藏もない。斯ういふ形の一軒建の家に住んで居る者は四二間の家に住んで居るのであつて、金は儲かるが結局は潰れる。しかも大きい財産が出來ずに潰れてしまふのが四二間家相の作用であります。

西の方に入口がある、裏口があるといふ家相は西方の凶相を以て判斷し、西『缺け』を以て鑑定します。西の方に口があればどなたが住んでも借金を殘してそこを立退くといふことになります。大きい家相は大きい借金を造る。小さい家は小さい借金を造る。前にも述べた通り、西方の凶相は金の喜びのない家相、それがために一言にして金苦の家相といふのであります。

家相の眞理は天地の眞理

家相の鑑定に於て數法が判つてゐないと困る故、今、茲にその概要を説く事に致しますが、數にも陰陽があつて、陰數と陽數との區別があります。

一　三　五　七　九　これが陽數

二　四　六　八　十　これが陰數

陽は生きて居るが故に生數。陰は陽の反對なるが故に死數といふ。他人に物を贈る

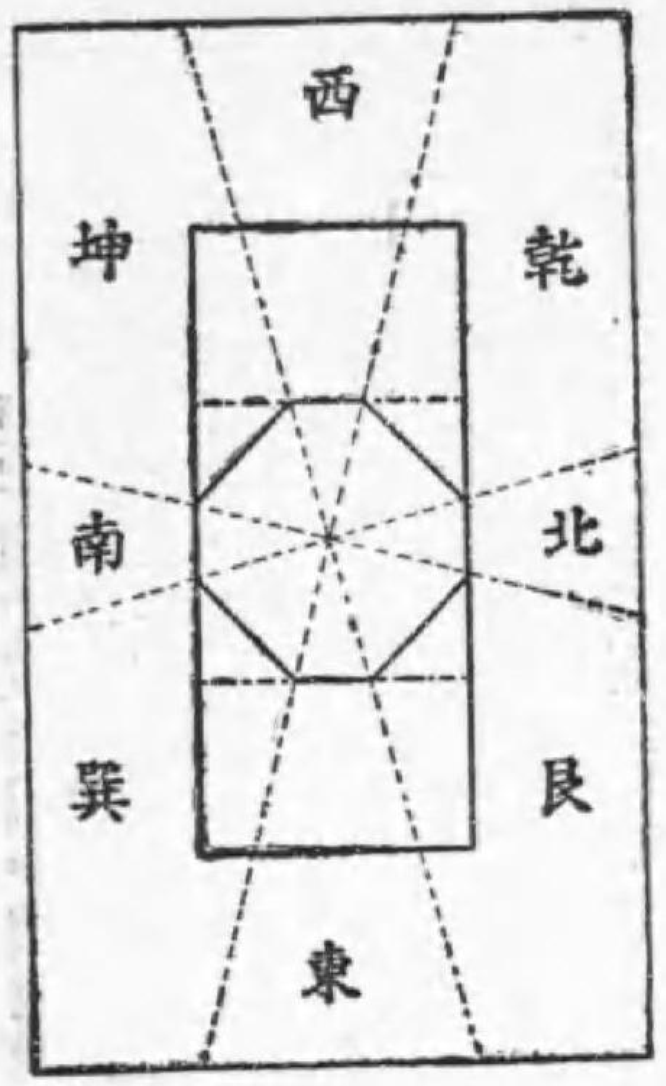
のに二とか四とかの數を嫌ふのは死數なるが故である。魚をやるにしても三尾とか五尾とかをやらないと禮儀に缺けるといふ習慣は、ここから出て居るのであります。

生數といひ死數といふのは何によつて出來て居るかといへば、生數はこれを天數といひ、死數はこれを地數といふて、天地の自然の理數に基くものなのであります。草の芽を見ても二本出るといふものはない、必ず三本出るか、五本出るか、或は七本又は九本出るかする。木の葉の條を見ても陰數になつて居るものは一つもない。總て天地が生む數は陽數になつてゐます。

天數といふものは天で丸い形、陰數は地で方形で角になる。男女が夫婦になつてしまつたといふことになると、必ず死に別れか生き別れかどつちか來るに定つて居る、夫婦といふ二の數は死數なるが故である。子供が一人あるとしてもそれには又嫁を取る、今度は四人の死數となる譯で、前途へ行つて必ず憂ひありといふのが人生の常であります。

天地が創造する力、發芽する力は必ず生數で、生數は殖えて行き、死數は死に向つて退いて行く。人間は人間を製造するやうに思ふけれども、人間といふものは天地が創造するものだ。首と手足を五體といひ、五感を持ち、五臟の作用で生き、五本の指を備へて居る、總て陽數のものを天地が造つて居る、また天地を造るものは皆陽數である。故に陽數はお芽出度い緣起のよい數であり、陰數は死數といふ事になる。生數と死數とはこれだけその作用に於て相違があるのであります。

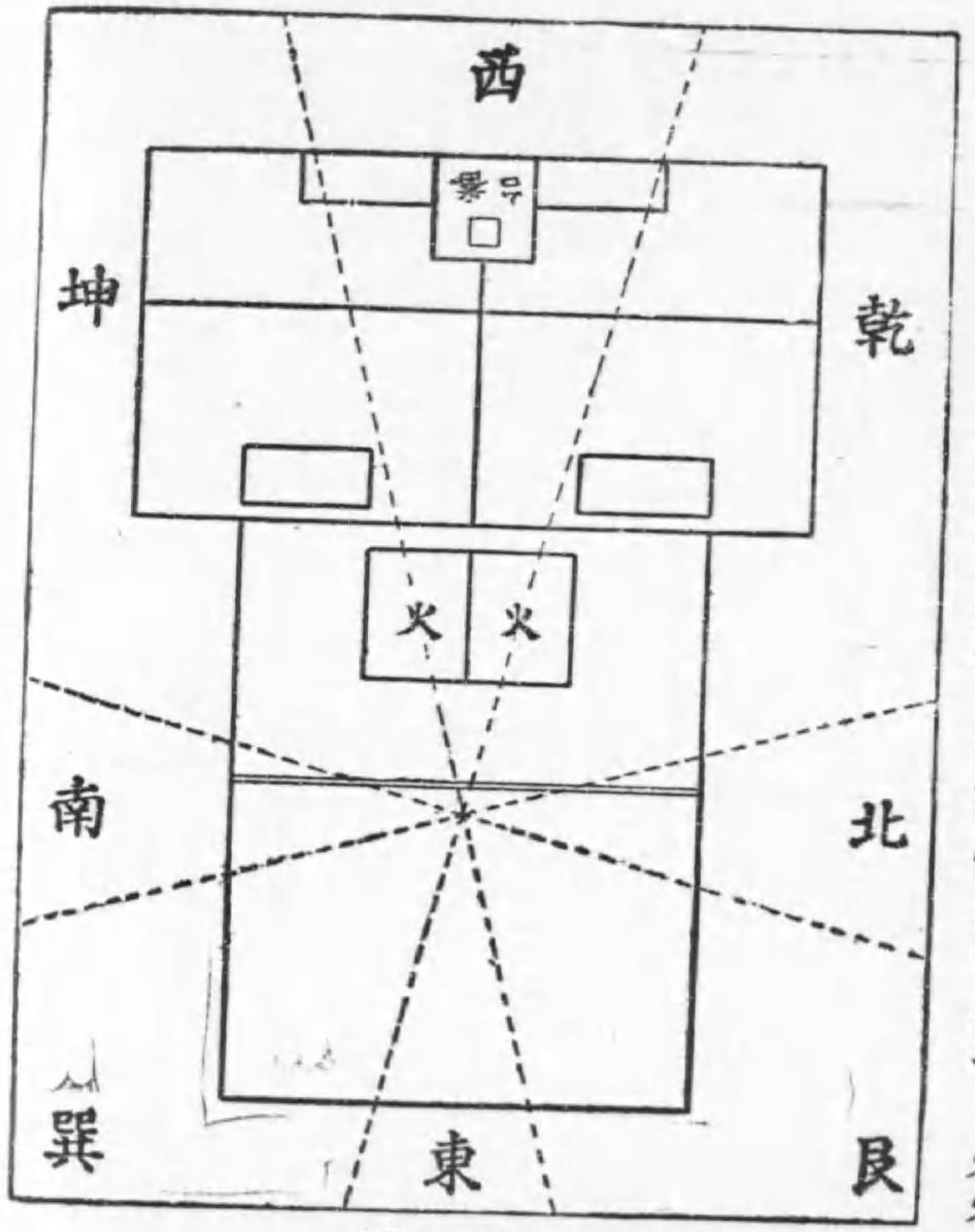
この原理から言つてこの第四號圖は四二間であります。若し外に便所があつたり、物置が建つて居るといふ事になれば四二間とは言へないが、單に四角の方形だけで、物置もなく、倉もなく、張出しもない其のまゝの形では四二間の家相と云ふ事になります。



此の樣な家に住居して何の商賣をしても一旦は繁昌するが成功にはならない。若し四角の隅を切ると圖の如く八方位の形となり家相としての見方も變りその作用も違つて來ます。

西方相尅の恐るべき實例

これは實地鑑定に當つた家相でお湯屋であります。火火としてある所が大きい釜のある場所であります。



第五號圖

この場合、湯殿のある方と住ゐの方とは境界が確立して居りますからこれを別に見て、家の中心を圖の如く置くのであります。この中心の置方一つで鑑定が違つて來るからよく注意すべきで、中心をどうしてここに置くかといふと寝起きするのは湯槽のある方ではなくこつちの座敷であり、ここに寝食をするのだからここに磁石を置かなければ鑑定が外れるのであります。

私はこの湯屋に鑑定を頼まれて行つた、行つて見ると三十二三になる綺麗な女の人が番臺に居る、一寸見るとおかみさんだか娘さんだか分らない、話を聞いて見て初めて娘さんだといふ事が判つた、三十二三になつてもまだ縁談が出來ない、どういふ譯かといふと惡い病氣があつて時々倒れる、癲癇のやうに倒れて顔が眞つ赤になる、一つ時間餘もすればケロリとそれが癒つてあとは平氣で居るといふ奇病。その病氣が一つあるために縁談が整はないのだといふ事で家人が困つて居るのであります。

調べて見ると**その娘は七赤金星の生れだ、**座敷を中心として見ると丁度西方七赤に向つてこの大きい釜があり盛んに火を燃して居る、朝から晩まで火が絶えない、そのために火尅金、火尅金と尅されて七赤の娘が病氣になつたのであります。家人の話では娘が何の病氣で倒れるんだか分らない、顔が金時のやうになつて倒れる、どこが惡いんだか病院に行つても分らない。このため三十幾つになつても嫁入する事が出來ず

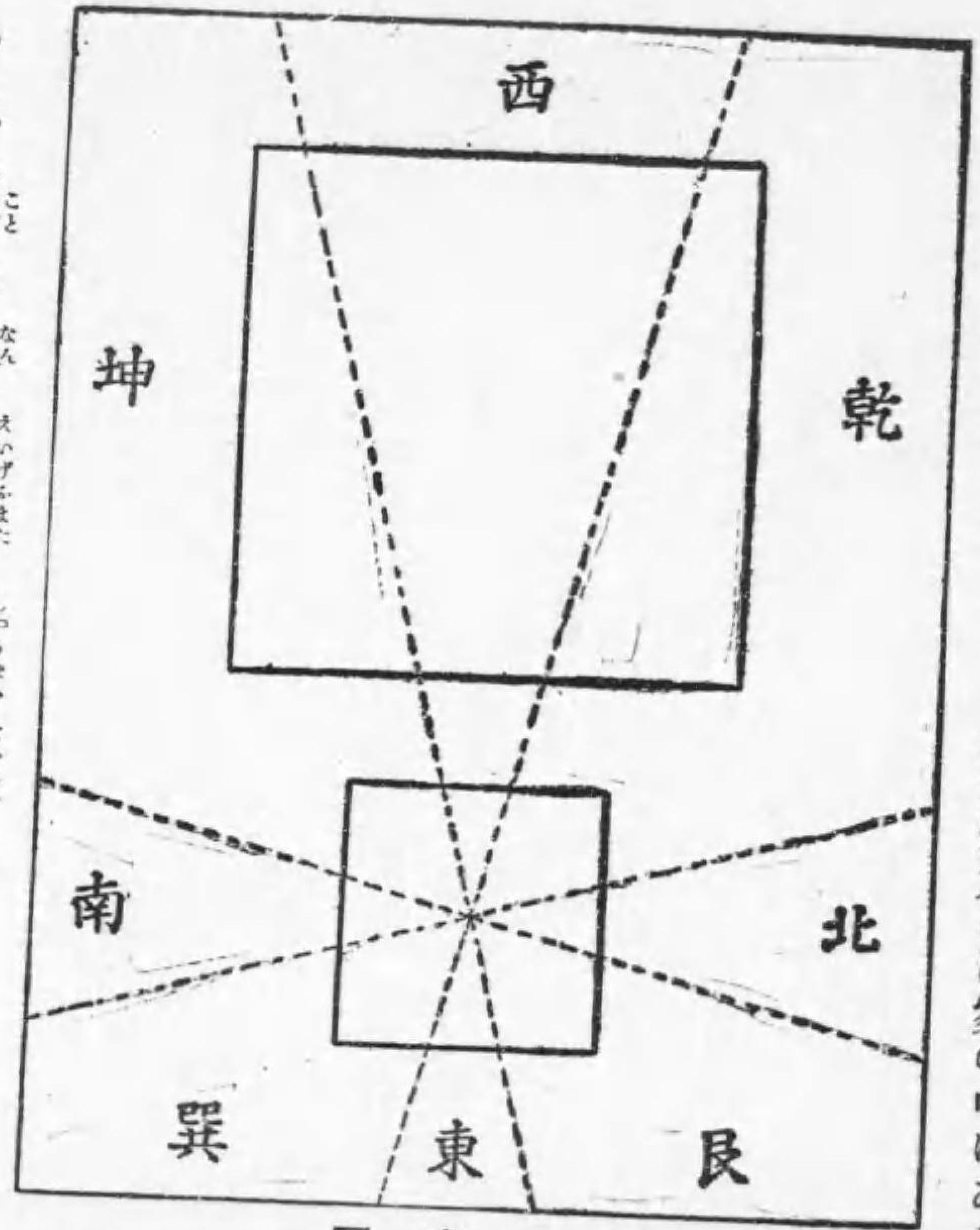
に居るといふのでありますが、**西方に斯ういふ大きい火があつても七赤の人が居なければ何事もなかつたのであります。七赤或は酉の年月に生れた者がこの家に住居する事になると、その人にそういふ奇病が起つて來る、一生を不運に送るやうな事になる。**現にその家には外に子供も居るがそれは何ともない、平穏無事だ。若しこの釜が北の方にあるといふ事になると一白の人がその病氣になる。これは家相の內容の鑑定法であります。

西に斯ういふ火があると、火其のものは九紫火星であるから、年中酉の七赤金星に火剋金と剋する、その相剋作用が行はれるために家庭の內容は年中不和だ。人が見ては分らないけれども內部に入つて見ると兌を口とする、兌を爭ひとするでちよい〳〵口爭ひが起つてお互に面白くない狀態が出來て居る。一日火を燃やして居るといふ事になるとかまどもまことに重大性があるのであります。五合の飯を炊く位なら何んともないが、湯屋のかまどといふ事になると、家相の內容に重大關係があるのであります。

この家に金は出來るか。といふに金は出來るが不思議に無くなつてしまふ、金が出てしまふ。熔けてしまふ、故に澤山あるやうに見えて金は割合ない。これも凶相の一つで矢張り潰れる事になる。卽ち營業全體を見る時には家の中心を建物全體の中央に移して見る。中央の五黃土星の居る所にこれだけの火があるのだから火生土、火生土と營業を盛んに生んで行き繁昌するが、同時に東が『缺け』て居るから長男が死にますよ、鬼門にまで缺けが來て居るから親類に敵が出來ますよ、といふ鑑定になります。大體百圓の金が殘る目算がたつてゐても十圓しか殘らないといふ家相です。

營業を見る時と、家族の運勢・病氣・生死等を見る時とは磁石の振り方が違ふのでありますから、若しこれを同じに見る時は營業だけ當つても、何んのために娘に故障が來るのか判斷が出來ない事になります。座敷に中心を置いて見て成る程火剋金と娘の肺を剋し、肺から心臟を惡くして居るために顏を眞つ赤にして倒れるんだな、といふ事が分るのであります。營業は東西の『缺け』『張り』を以て見ればよいのである。重ねて申しますが、營業上の盛衰を鑑定するのと、家人の運勢を判斷するのは中心の置

き方が違ふ處に重點があります。尚ほ鑑定には家の中にあるものをも考慮に入れ、火



第六號圖

があれば火といふもの
の吉凶が働くといふ事
を忘れてはならないの
であります。

美名發揮後に滅亡の家相

この家相は天下に名をなすやうな美名を發する相で、自分の住ゐの外に大きな建物があるといふ事は、何の營業又は商賣の性質を問はず、一旦は非常に大きく發達するものであります。母屋に何倍する力のあるものが一方にあるといふ事は非常な發達を意味するもので、一年か二年のうちには相當天下に名聲を發するやうな事が出來て來ます。然しそれは未の年から申、酉、戌、亥に來るのであつて、子の年になるとガラになります、營業がガタンと閑になります。今までのお得意が他人に奪られてしまふ、今まで立派な番頭が居たがそれが出てしまふ、非常に盛んだつた家運が茲に於て初めて滅亡に向ふといふ事になります。

最初非常に大きな發達をするから、人氣が起り名が擧がる、同時に大きな財産が出來る、併しそれには永續性がなくて、結局は潰れるといふ事になるのであります。

茲に於てどうしても天相式第一、第二、第三位の家相を造る外ない。天相式の家相に就いては別に詳しく述べますが、この外の家相は一時の繁榮はあつても必ず潰れると定つてゐます。唯人は何時その滅亡が來るかといふ事が分らないために、平氣で住んで居るだけであります。天相式によれば何年でも年數がたてばたつ程段々よくなる、いつ潰れるといふ事がない、來る年も〳〵發芽した芽が毎年繁茂して行き、いつにな

つてその木が枯れるといふ事がない、肥料が十分にあるからだ。

普通の家相に住居して居るものは何れ潰れる運命になる。唯現主人の代に潰れるか子供の代になつて潰れるかの問題だけで、永久性がない。現在は一概に金が出來る、五年か十年のうちに大財産家になれるが、子供の代には乞食になるといつた風であります。大きな家相が別棟にあつて、繁昌し出すと何萬といふ金を儲ける時代もある代りに、金を儲けてから乞食になる結果となるから、天相式の家相から見ればこれもよい家相といふ譯に行かない。

西の方にこれだけの力があると、ここの營業に金主が出來る、品物をウンと仕入れたいから五萬圓をどうか、といへば五萬圓直ぐに出してくれるやうな金主がつく、三萬圓といへば三萬圓、幾らでも金を貸してくれる。それが一つの德となつて家運が非常に繁昌する。西の家相は總て金錢の喜びを得る事になつて居りますが、たゞ維持が出來るか出來ないかの區別があり、大きな金を儲けて必ず潰れるといふのがこの第六圖の家相であります。而して又西の方に斯ういふ吉相のある家は必ず强盜の難があります。この家には正金がウンとある、質屋或は金貸、兩替屋をして居るといふ事で、金がある事を表看板にして居るから强盜の難を蒙り易い。金が出來るからその難もあるのであります。

この第六圖に於ては大きいのと小さいのと二つの棟になつて居りますが、小さいのは母屋で自分とすれば大きい棟は世間と見ます。若しこの二つの棟が廊下で繫がつて居れば金を出してくれるものは親類である。若し廊下がなく緣が切れて居つて雨がこの間に降り込むやうになつて居れば金主は他人と鑑定するのであります。

總て家相に於て他人と親類との關係を見るのは、家根があつて續いて居れば親類であり、家根がなく雨が降るといふ事になると他人と見るのであります。他人が金主か親類が金主か、その繫がりの有無に依つて二つの區別はあるが、兎に角この第六號圖の家相に於ては、立派な金主を得、一旦は馬鹿々々しい成功をして光りを發するが、それは必ず消える光りだからいけない。十年も續けばよい運だ、西の方乾兌に四九の數ありで、長く持つて九年といへば一杯の運命。處がどこの家も九年持つて居ません。

中には十一年持つて居るやうな形に見えるものもあるけれども實際は九年で潰れて、外見だけが殘つて居るに過ぎません。だから鑑定は數法から言つて九年といふ事を言はなければならぬ。

ここの家に住ゐをして成金的成功をしたいと思ふが何年頃から成功に進んで金が出來ますか、といふ質問に對しての鑑定は、この家の吉相にそこの家の主人の本命星が廻つた年といふ事になります。卽ちこの家には西の方にこれだけの吉相がある。主人の本命星がこの吉相たる西方に廻つた時に金がウンと入る事になります。三碧の主人であると本人は貧乏して居るが、西方にその本命星が廻つた時に金主がついてそれが動機で金が出來る事になる。何の星の人でも、この家に於てはその星が西に廻つた年か來ればこれは必ず大きい金が入り運命が開拓されて行くのであります。

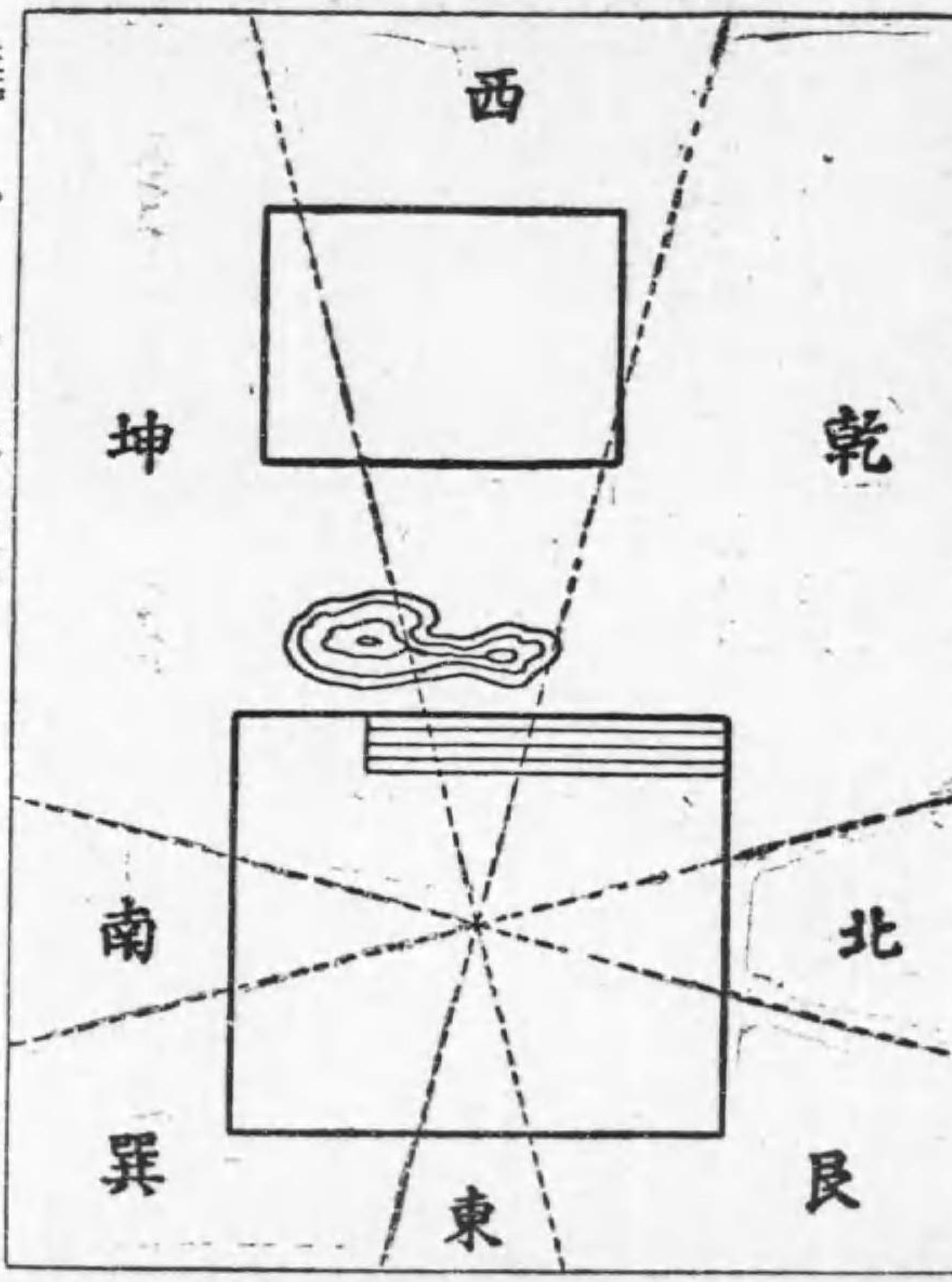
この家の母屋に若し椽側があり、口があるとすると、それはこの家の家族のものだけの判斷をする。西の方に椽側があり、口があれば肺を患ふ者が出來る。營業上の事はこれだけの別棟があるのだからこれを以て判斷しなければなりません。この別棟が無かつたら本當の四二間で、これでは潰れざるを得ない。この別棟があるがために生きて居るのであります。この家の主人よりも家族よりも外から立派な大人物が番頭となつて入つて來るからこれが原因で繁昌する事になります。主人は尋常小學校を出たか出ないかでハガキ一枚書く事も出來ないが、番頭は大學を卒業した立派な人間、これが入つて來るために一層繁榮を招來する事になるのであります。併し乍ら終局に行くと、この母屋と別棟との喧嘩になる。主人と番頭との爭ひになる。一軒建であつて大きい別棟があると、最初は大いに成功するが將來敵となつて番頭が主人の身上を無理に潰す事になる。あの番頭が、あの支配人が潰したんだといふ事が出來て參ります。要するに一大成功をした後に潰れるといふのがこの第六號家相の特徴であります。

重病の發生する凶惡家相

この第七號圖に於ては西の方に別棟があつて、其の間に泉水があります。**泉水に依つて起る病氣は必ず癌腫若くは結核であります。**西にこれだけの椽側があるだけでも

肺を患ふのに十分だ、然るに池があるといふ事になると必ずそこに黴菌が生ずる、經

第七號圖



い肺病でなく立派な肺結核であり、肺が腐るといふ病氣に罹る。西の方に池があるから「右の肺が腐つて來ますよ」「醫者が診て右の肺が惡いと言ひませんか」「右の肺が結核で次に左に移りますよ「斯ういふ判斷になる。然もこの泉水は未申の方に跨つて居る、「胃と腸が結核になりますよ、胃癌や直腸癌になりますよ」未申の方に池があつても泉水があつても胃癌或は腸結核になり、それが原因で必ず病ひが胸部に來る事になる。腸が惡くなくつても——腸が惡ければ尚更、どつちにしても肺に來る。坎を流水とす、水はどこにあつても坎の一白だ、流れ移るといふ判斷だ。總て水は移るもの、「頭に斯ういふ腫物が出來て困りますが、」「それは一白を使つたからですよ」といふ、自分から生み出したものでなく、どこからか傳染つて來たのだ。

この家の西方の緣側、泉水のためにどうしても肺結核の生ずる事は免れないが、若し緣側でなく壁になつて居るといふ事になるとそれがない。壁になつて居ると泉水の氣を受けないから、母屋に住んで居る者には肺結核も肺病も起らないけれども、水氣を切斷する壁がなく、また口を塞ぐ何物もなくて開いて居るとなれば、この家に住む者の中特に七赤の者が早く病氣となる。七赤の者に限らず全家族のものに傳染るといふ理窟があるが、七赤の者は誰れよりも早く肺病に侵される。そして家族の者其の他雇人までが傳染して肺病に惱むといふ結果になる。七赤の者は自發の肺病だが、他の者は自發でなく傳染つた肺結核といふ事になり、この病氣はお終ひまで癒らんのであり

ます。

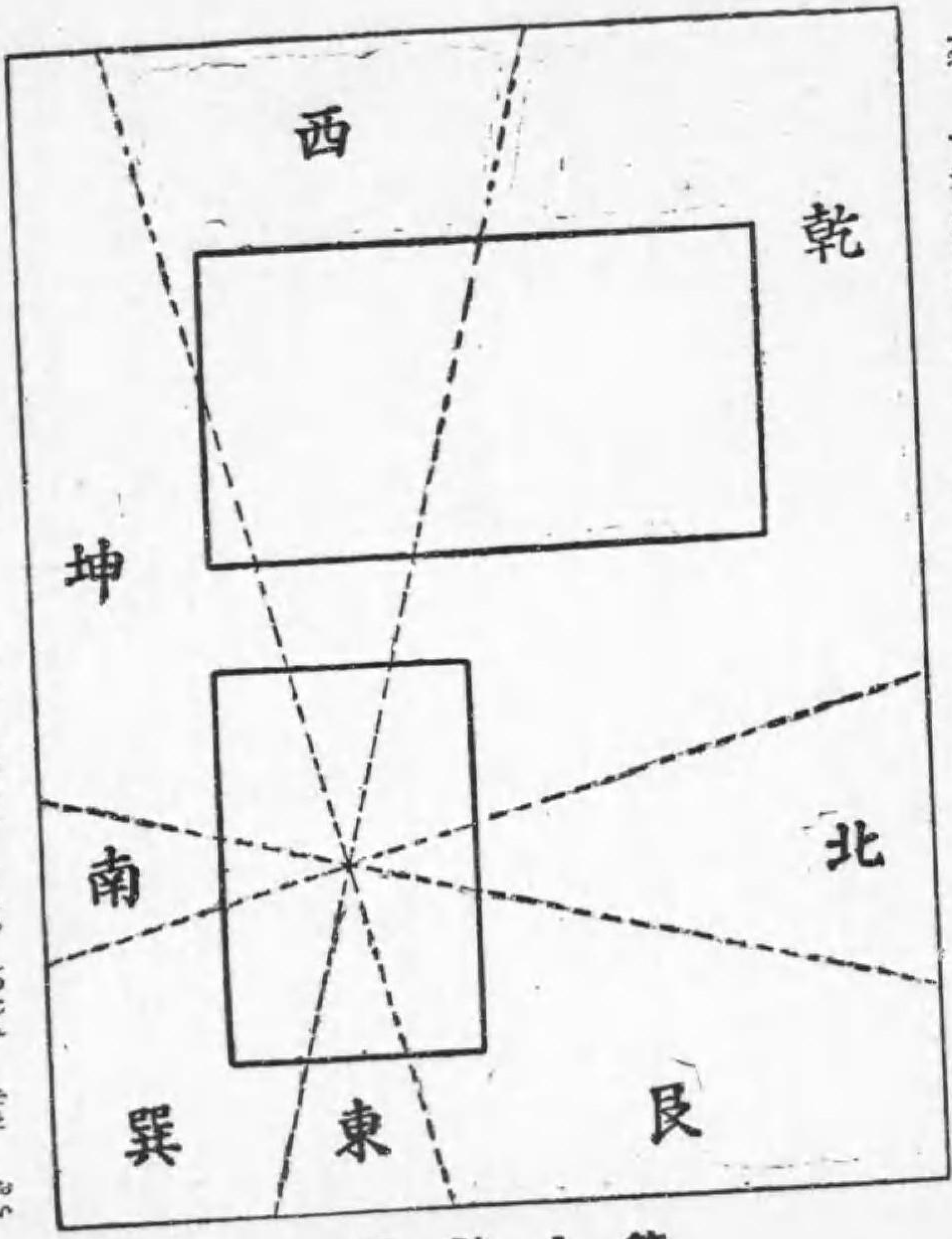
水溜り、池、泉水、總て水といふものはどこにあつても癌腫、結核性といふ事になります。若し北の方に口があつて、そこに泉水があるとすれば、北は股だから女は必ず子宮癌のために命を取られる。必ず中年を過ぎて、四十歳を越えてその病ひに罹る。この家に生れて五歳まで育つたものは、たとひその後鄕里を隔れて東京へ出ても、大阪へ行つても同じ事、行つた先で四十代になると必ず子宮癌で死すといふ事になります。「いや、あの家を出てから三十年以上になるんですよ」と言つても、必ず四十代になつて子宮癌が起る事は避け難く、ここで生れた者が災難に罹るのであります。

北は股の病氣だが、**西の方では肺に來る、何時その癌が來るか、いつ肺が腐るかといふと、その凶相に自分の本命星が二度目に廻つて來た時に起る。一廻り目の時は免れる場合があるが、二廻目の時は絶對に逃れ得ず又癒りません。ここで生れた者は勿論、途中から越して來たものも二廻目になるとやられるのであります。その人が若し七赤、酉の年月に生れたとなればもう防げない。**茲に一つ逆法といふものがあつて、

西の方に本命が廻つた時に出來ないで、東の方に廻つた時に肺に來るといふ事もあるが、それは數が少なく十人に三人位のものであります。東が的殺になつて、十干と十二支の運命がここに廻つて來るから的殺のためにこれが出來る。結果は同じだ。寧ろ的殺で出來た方が病ひが最も重い。但しよく注意して置く事は、的殺に本命が廻つて病ひが起るといふ時は四十以下の者では起らない。必ず四十七八才の者、西の方位は老人の方位だから命を取つてから來る、五十以上になつて的殺に來るといふ事になるとこれはどうしても救ふ道がない、それをよく承知して判斷しないと外れます。この池といふものは黴菌で、これによつて發生した病氣では必ず痛みを感ずる所が出來ます。坎を惱みとす、坎を苦しみとす、痛み苦しみを生じて來る。又西といふ方位は兌を少女とす、少女について必ず故障がある。西の方に池、或は椽側があれば、其の內の少女は色情關係について亂に陷り誤りを起す。ここに生れたものは多くさういふ傾向があり、何の星を問はず、娘に色情關係が附き纏ひ、年中それが一種の病氣となるのであります。**定位の七赤金星から金生水と坎の一白を生んで出る、坎の一白は卽ち**

色情で、其の色情關係を金生水と生んで出るから、常に素行の修らない娘が出來るのであります。その家に生れない者でも、その家に三四年以上住んだだけでもさういふ關係が出來る場合があります。この色情關係は家族の者の中、極めて接近した者の間にそれが起つて來ます。

西の家相には金の出る道と入る道と二つあります。折角入つた金が無くなつて、大抵入つた金だけの借金が殘るものです。一時は盛んで金も入り財産も出來たがスッカリそれがなくなつて借金が出來た。其の借金のために潰れたといふ場合、その借金の程度といふものは入つた金に正比例するものであります。「一番資力がついて一番財産が殖えた時はどの位の額でしたか」「三萬圓位のものです」「それでは借金も三萬圓ありませうね」財産の殖えただけの借金を造るのが普通だ。財産が三萬圓あれば三萬圓の借金を背負つて潰れる事になるのであります。最高十萬圓の資産がありましたといへば、十萬圓の借金を背負つて居る譯で、借金の程度は財産の殖えた頂上を指せばよい。それだけの財産が出來ればそれだけの信用が確立して行く、信用の力だけの借金が出來、一番滿開になつた時代の力だけの借金が出來るといふ事になります。或は乾兌に四九の數あり、四千圓或は九萬圓、七赤の數を以て論定するのであります。



第八號圖

西と戌亥張り家相の特徴

第八號圖の母屋の家相は四二間でありますが、乾と西との間は張つて居ますから乾西兩方の張りの家相であります。乾は主人の位、主人は外に於て十分に活躍する、營業に

向つて眞劍な努力を繼續して行く。大勢の人を使ふ事が名人になり、人を旨く操縱して十分營業の進展を圖る力が助長される。細君もその力が培養されて行くから夫婦揃つて偉くなる譯だ。どういふ風に偉くなるかといふと、第一口が上手になる。西方兌を口とす、兌を喜びとす、口が旨くて人を喜ばすといふ力が出來る。大勢の人を引きつけるだけの威力が備はる。だから何の商賣も繁昌して金融がついて來る。金が益々儲かるから信用が增進して行く。これが西から乾の二方『張り』の特徴であつて、これは容易に潰れません。

西だけ一方の『張り』では細君が死ねば駄目だが、これは細君、主人どつちが一人死んでも、その後幾年でも維持が出來ます。二方跨りの吉相のために主人が死ねば細君が代つて働く、細君が死ねば主人がその代りになる、仲々潰れないのであります。

この家と交際して見ると仲々吝い、あんなに金を持つて居ながらケチ〳〵して居る、と世間の人が批難する、併し批難を受ける人が偉いのであります。批難は受けてもこの家に不景氣なく、金に困るといふ事を知らない。これは夫婦共にさういふ風に十分儉約をするからで、どつちも吝い性格に出來て居るのであります。夫婦ばかりでないこの家に住む雇人まで吝い、乾の方に斯ういふしつかりした家相があれば、どこの家でもさうなのであります。

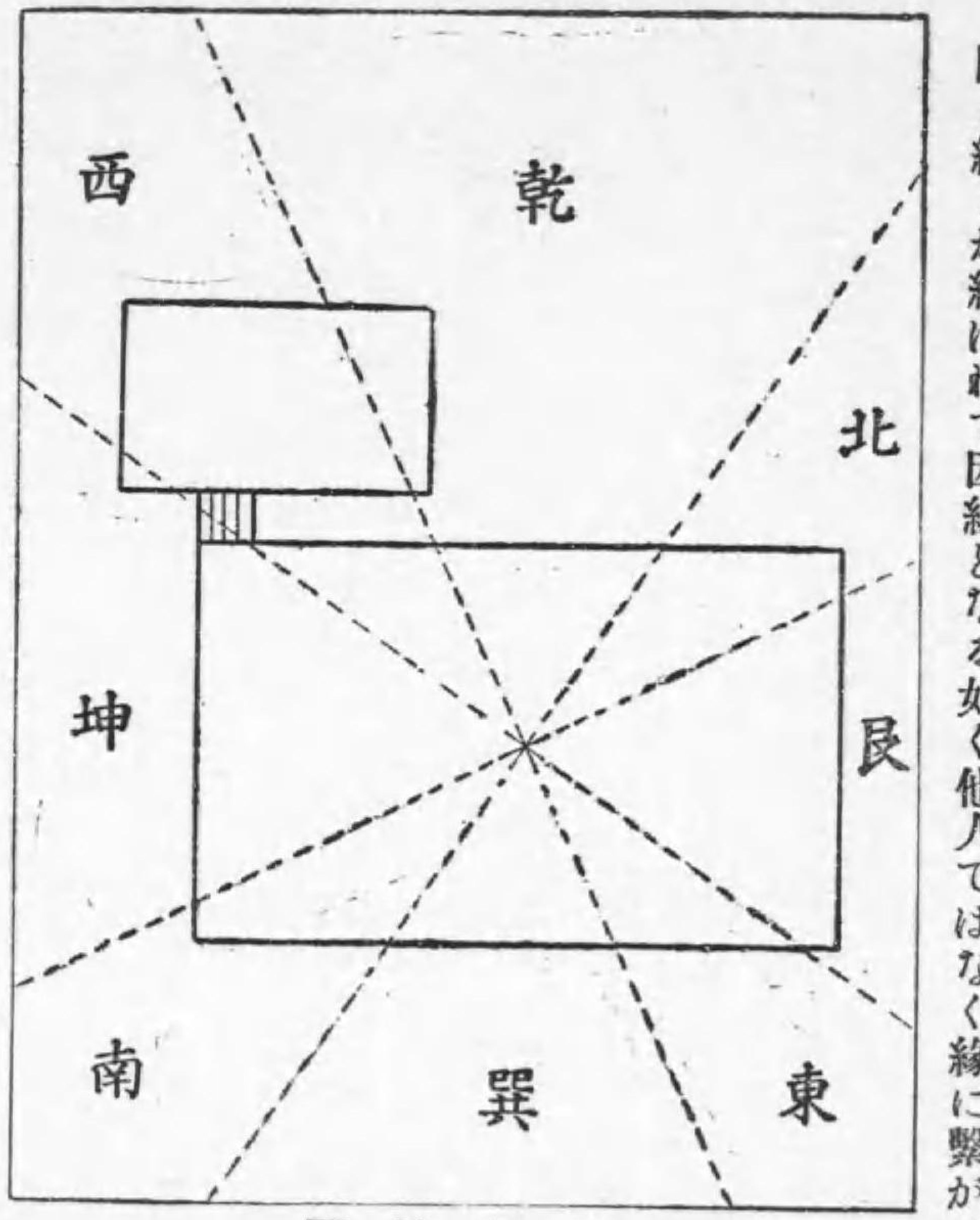
乾の倉は極く良いと昔から言はれて居りますが、そこの主人は極く吝い。西の方の倉は細君が吝い。この第八號圖家相では兩方入つて居るから夫婦共に吝い。嚴重に儉約をし、餘計な金は五厘も使はず、その代り慾張る事は五人前も慾張る。從つて財產が出來て、夫婦の生きてゐるうちは決して財產が減らない。その代り子供がみんな不良の形があり、二代目になつて滅びるのが普通である。二代目が相續する時になると多く潰れて行くので、俗に二代無しの家相と云ふのでありますが、併し斯の家相は兎も角も吉相の部に屬する家であります。

親類と密接關係ある家相

第九號圖に於ては椽側があつて二つの棟が繋つて居ります。椽側の椽は卽ち緣で、

因と縁とが結ばれて因縁となる如く他人ではなく縁に繋がつた親しい間柄でありま

す。家相に於ては二つのものが椽側に依つて繋つて居れば親類の形と見る。椽側がなければ椽が切れて居るから他人と見るのであります。故に、この椽も母屋に住む人の兄弟とか、叔父さんとか叔母さんとかいふ者、卽ち、澤山金のある親類があ



第九號圖

つて、その人が金主をしてそれが成功になる家相であります。

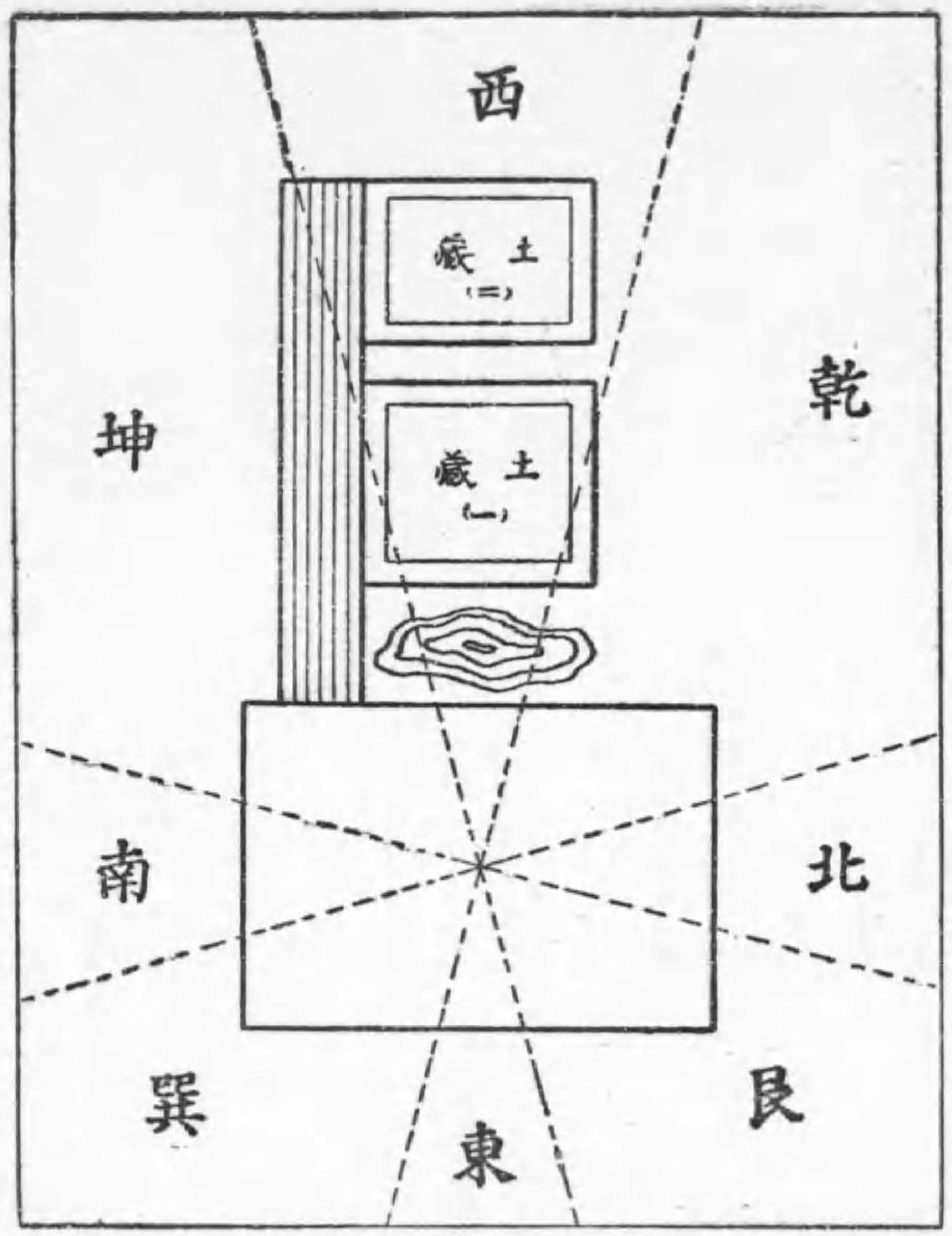
故に吉相だ。吉相であるけれどもこれも倒れるといふ時期のある家相で、西方の別棟のために一時は盛んになるが、外の所は空つぽだから他人の信用がなくりいつか潰れると言ふ事が來る。

今まで說いた家相に於ては、幾ら金が出來ても多くて大抵何萬といふ限度、十萬以上にはならんのであります。最高は何萬、大抵何千といふ金が出來ればそれでおしまひである。この第九號圖に於ても矢張りその通りであるが、この家相は特に親類關係から立派な嫁が來る。或はよいお婿さんが癸の七赤の金を持つて來る。山林や地所を持つて嫁に來るといふ家相、婚姻の事がなければあとでさういふ親類との關係が生じて金錢の喜びとなる家相であります。總て西の方はみんな金錢の喜び一方を司るものであります。この家には口がないから肺病患者も無し、金錢の損害もない。斯ういふ家に入つて居ると定つた金が入つて來る、商店なら商店から定つた金の收入があるがそれのみではなく、營業以外の金が入つて來る、營業して儲ける以外に、營業以外にひとり手に入つて來る金がある。それを金錢の喜びといふのである。西『張り』は全部さういう判斷法でなければいけない。

主婦が大金持になる家相

この第十號圖は栃木の或有名な大資産家で、良い所の土地は大部分この家の所有だといはれ、金もあれば土地もある。外にも家屋はあるがこれは西の『二重張り』の家相で『張り』と『張り』が重つて居る。卽ち西に倉が二つあるのだ。この家相の力を以て、この家に金が出來るのであります。

(一)の土藏の力で直接この家に金が入つて來る。後ろの(二)の藏の金が細君の懐ろに殘るといふ事になつて居ります。そして寧ろ細君の懐ろ金の方が强く大きい。ここの家が萬一潰れる事ありとも、細君の懐ろには何十萬圓といふ金が殘つて居るといふ家相であります。細君の懐ろ金は減るといふ事がない、この家の身上よりも細君の懐金がよく溜るといふ家相であります。故に雇人や奉公人がこの家を出て獨立してからも、この奥さんから八千圓借りた、一萬二千圓借りたといふ事で、この奥さんに助けて貰つて居る、奥さんの懐ろ金がそれだけ出來るのであります。『二重張り』は總てさういふ作用のあるものであるから二重に張つて居るといふ事は決して惡い事でない。

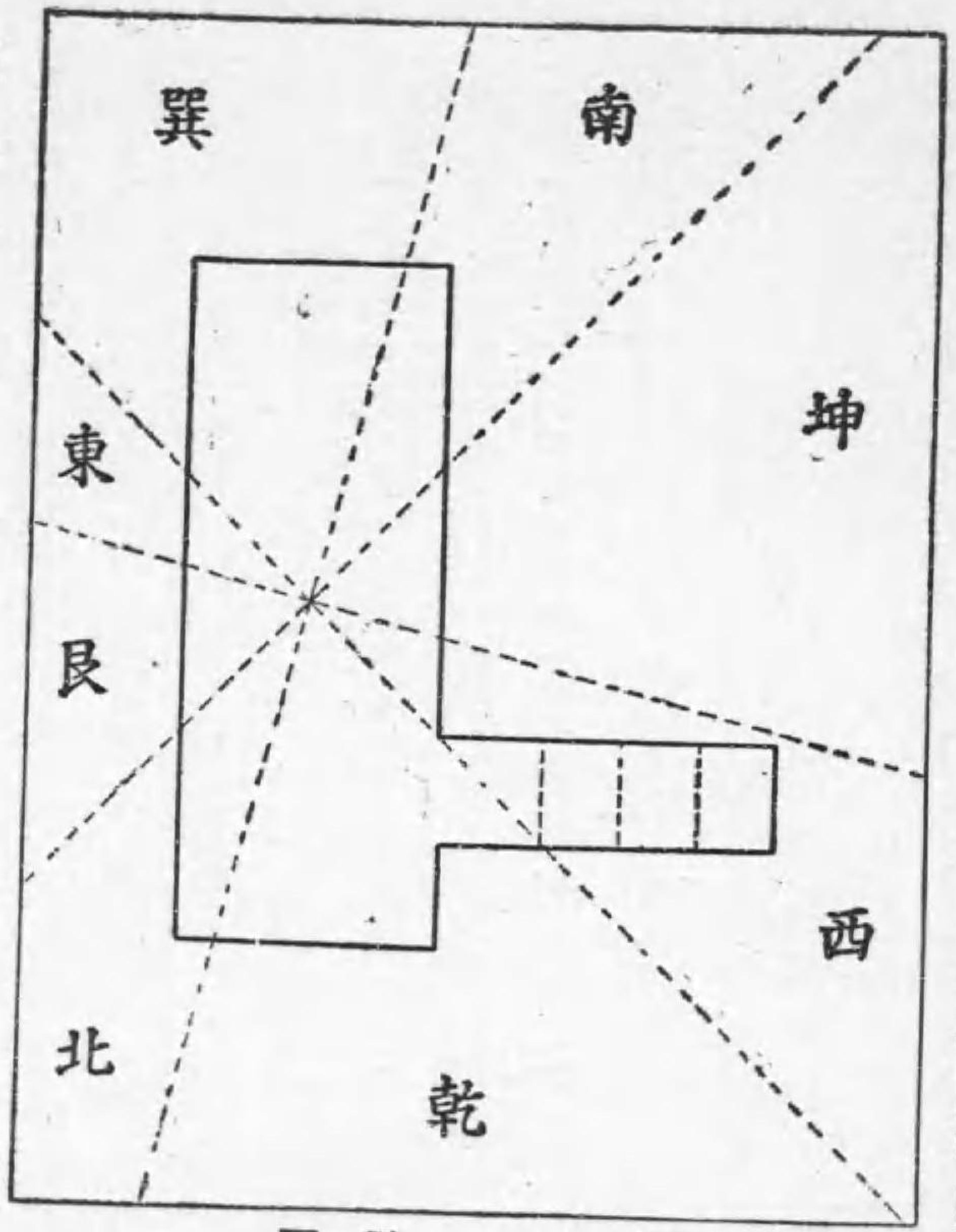


第十號圖

特にこれだけの二重張りは大吉相で、おかみさんの財産の方がこつちの財産よりも餘計だ。外に理窟はない。店の方の身上は潰れてしまつても細君の懐金で何十年でも遊んで食つて行けるのである。**これは藏だからさういふ判斷をするのて、物置てあると力が小さいから金高も低い藏だから何十萬圓に殖えて行くのであ**

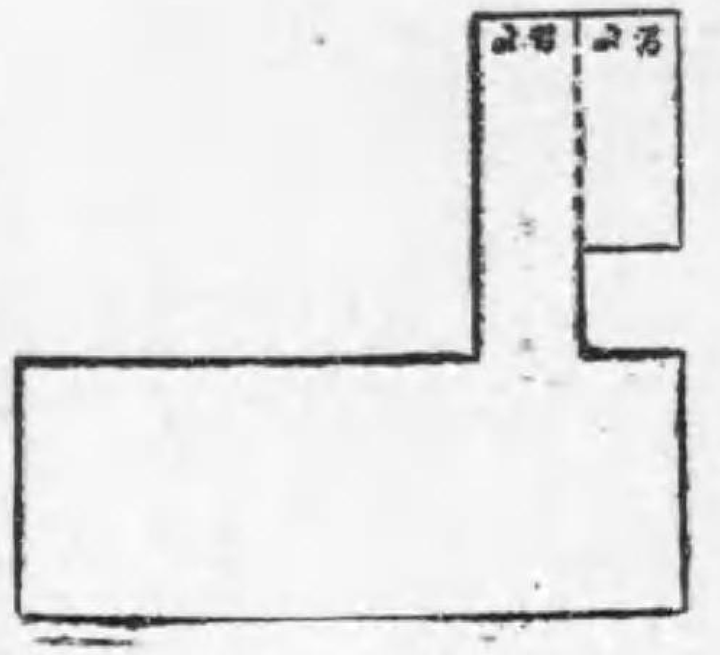
る。兎に角も西『張り』の家相は、金の出來る事に於て間違ひないのであります。

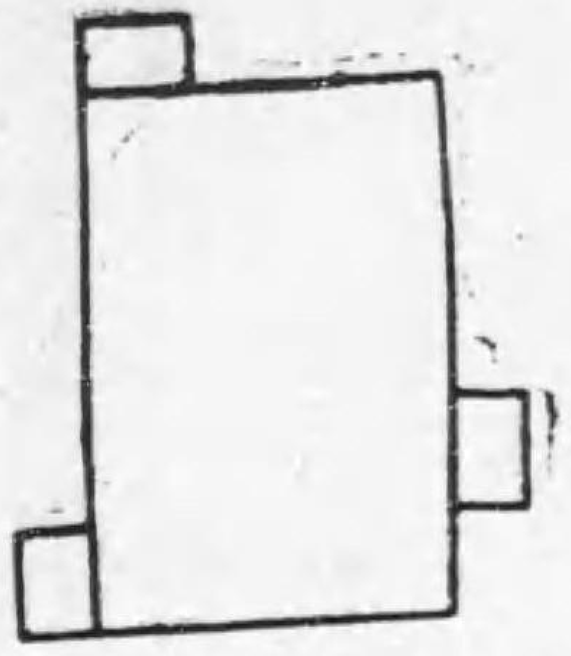
吉相であつて凶相に變る



第十一號圖

第十一號圖は西に向つてこれだけの『張り』がある。これだけの『張り』のある家相といふものは、これだけの金が出來る事になります。金は出來ますがこの『張り』は二倍も三倍も張り過ぎて居る。西の『張り』は細君が非常に働く家相だけれども、この『張り』過ぎのために五年、十年たつうちに細君が働く事に飽きてしまつてピタリと働かなくなる。ちつとも働かない、何もしない。それが原因でこの家は必ず潰れてしまふ。**『張り』過ぎるといふ家相は『缺け』の家相を以て判斷しなければならぬのであります。**





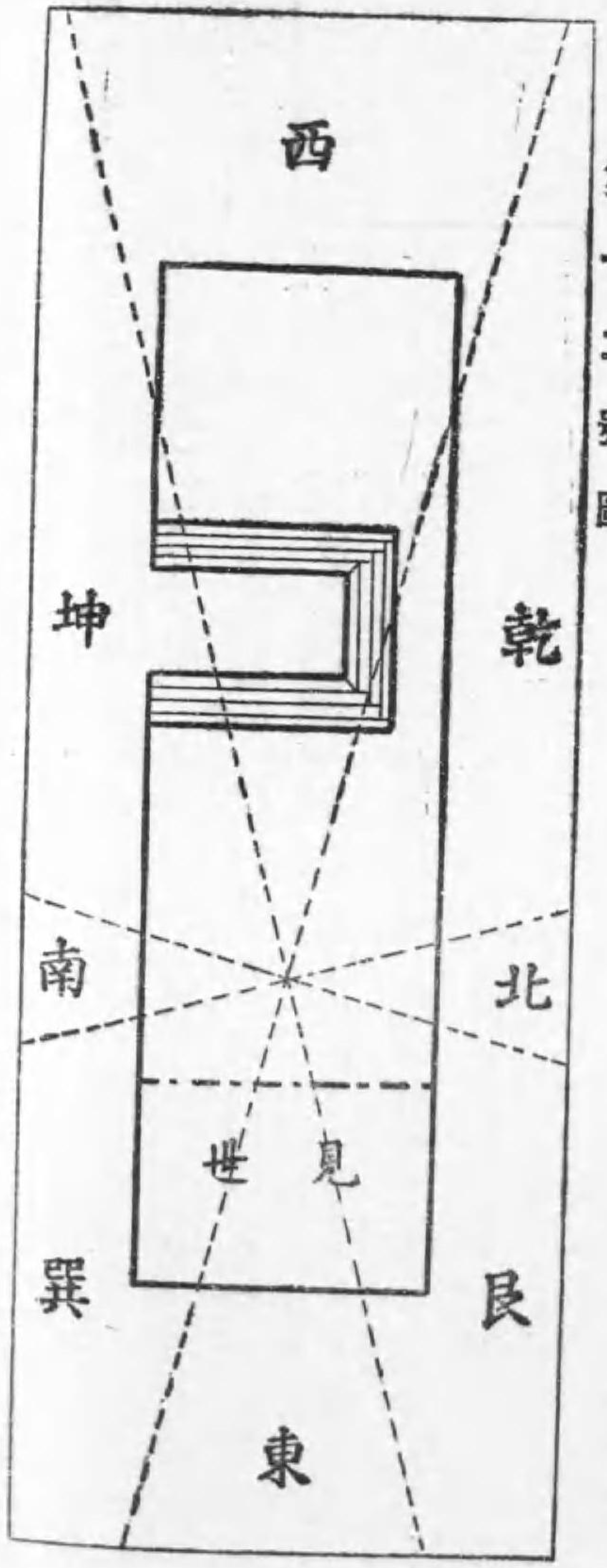
若し『張り』過ぎの箇所が幅二間あるとして、更に二間上圖の如く『張り』出させると頗る吉相になります。二間ある巾に四間張出させる事はいけない。『張出し』は總て二間の巾には二間以內、詰り倍以下にすれば、萬世不朽、動かない家相になります。『張り』過ぎては『缺け』になつて張りの德は自滅して西の喜びが無くなり、しまひには借金を背負つて引つ込む事になりますから、『張り』『張出し』は必ず倍以上に出てはいけない。一間の巾なら『張り』出る所も一間、これで十分だ。**六尺の押入れだけの『張り』が出るといふのは非常に吉相で、小さいといふけれ**

ども、小さいから吉相だ。押入れの『張り』だけ出すといふ事は次の圖の如く東西南北どこにあつても吉相である。『張出し』は小さいのがよいといふ事になつて居ります。

金運の家相も忽ち潰滅す

第十二號圖に於ては自發の肺病に倒れる事は致方のない家相であります。肺が腐つて無くなる。この『缺け』の部分だけ犯される事になります。しかもこれは自分から

第十二號圖



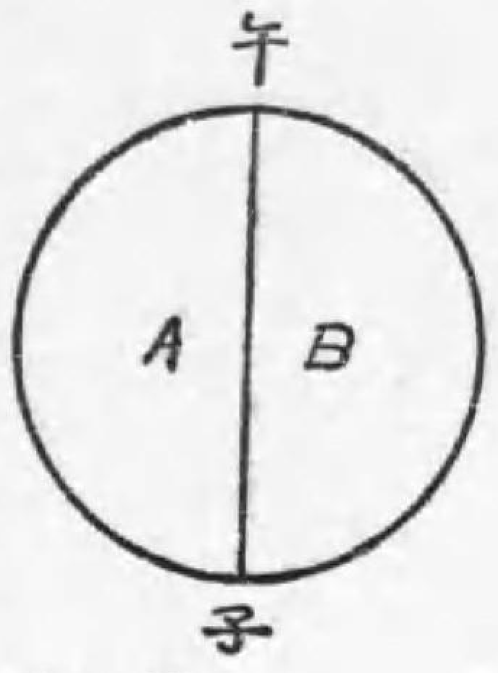
生む肺病です。斯ういふ家に生れたものは勿論、移つて來てここに十年住んでも同じくその性質の病ひが起ることが多い。金は出來ますが出來ても一時的で、しまひに潰れます。

壁があつて全部塞がるとよいが、圖面の通り兩方が廊下だから病ひが起る。この家には金はある。併し、其の金は銀行に預金してある。銀行預金をして居りながら澤山借金を製造する家相なのであります。無くて借金するのでなく、あつて借金する。別に金を藏つて置いて、これだけの借金を背負ふのであります。長く住んで居れば居るほど大きな借金を背負つて出てしまふ事になります。出なければ潰れる。金が出來て潰れる不思議な家相であります。西にこの口があれば誰れでもその通りであります。

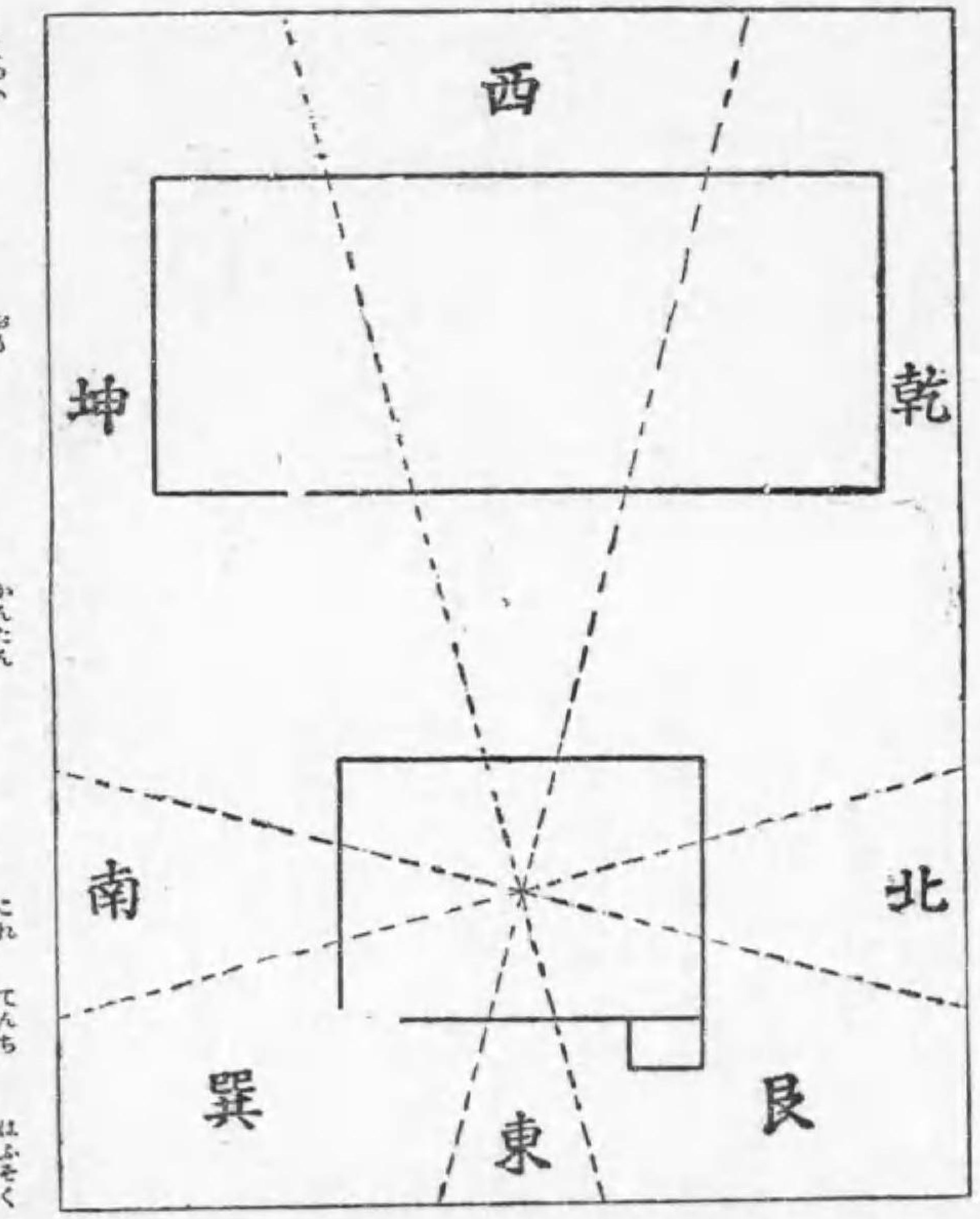
其等の災禍は生れた月の星が、年盤で西方に廻つた年に來ます。大抵二度目が廻つた時に來るのが普通だが、若し西に廻つた年に來なければ、本命が中央に入つた年に來ます。これが鑑定上の鐵則になるのである。この二つ以外に起る理窟はない。この種の家相に於ては皆斯くの如き過程を經るのであります。

斯ういふ家に生れたものは極く瘠せて居ます、肺が弱く瘠せて居ます。又斯ういふ家で生れたものは西にこれだけの力があるから一旦成功する事はあつても、五十の坂を越えてから乞食の如く零落するものが多い。總て西方の『缺け』『張り』の作用は以上の如く變轉極まりなきものであります。

家相は天地の法に準據す



上圖の如く子から午に達する線を子午線といひ、これを境としてＡＢの二つに分れる。Ａは一日に取れば午前であり、Ｂは午後となる。人の一生に取ればＡは若い時代であり、Ｂは老年といふ事になります。方位と季節に取ればＡは東で春であるが、Ｂは西で秋に當る。故に西の方に『缺け』があると年を取つて困難をする。西の凶方に移轉すると晝過ぎになつて災難が來る。東の凶方に移轉すると午前中に惡い目に會ふ。東の方に移轉して晩方になつて火事を起すといふやうな事はない。十二支でも子から巳までは午前、午から亥までは午後であります。



第十三號圖

斯樣に一日二十四時間が分れて午前と午後になつて居るやうに、人間の一生涯の道程に於ても勿論初年と晩年との區別があります。西は總て老後の運、年を取つての運といふ事になつて居るのであります。此の事に關しては後日詳細に述べる機會があらうと思ひますが、簡單ではあるが是が天地の法則であり、家相の眞理の一端

となるのであるから、この哲理に就いては、特に注意を拂はなければなりませぬ。

三方跨りは非常に吉相也

第十三號圖、これは三方跨りの吉相であります。これは三方に跨つて居るのであるから鑑定の方法もそれだけ異つて來ます。卽ち、この家相は容易に潰れない計りでなく、金の出來る力も非常に强い。

『天相式』の家になるとどこの家でも必ず三方跨りの棟が一棟出來る事になつて居ります。大正館が造つた家は三方跨りの一棟が無いといふ事はない。三方に跨つて居る位强い家相はない。これが眞の大吉相の家といふものであります。

この第十三號圖に於ては西が働く、乾が働く、坤が働く、三方に跨つて居るから三方の德が來る事になります。未、申、酉、戌、亥、の各月が働くから一年中の半年は始終繁忙である。然しあとは普通だ。三方跨りの家相といふものは、どの方位にあつても最大吉相といつてもよい。北にあらうと、東の方にあらうと、南にあらうとそれは構はない、三方位が完全にかかつて居る家相は吉相であります。併し坤といつても六十度ある。これを未、申、酉、戌、亥、各々三十度宛に區別して、その三十度にスッポリ入つて居なければ『張り』とはいへない、僅かに線にかかつただけではその力が小さいから、其の效果も少い事になります。

三方跨りの家相は、何の商賣をしても必ず繁昌して必ず成功になる。營業の種類を言つてはいけない、何營業を問ふ必要なく何をやつても繁昌します。營業は金を儲けるのが希望だ、金を損するのが目的ではない。第十三號圖の三方跨りの家相においては、未の月になると好い事が來る、申の月に又よい事が來る、酉の月も戌の月も亥の月も喜び事が重なる。西へ本命が廻つて宜しく、乾に本命が廻つても幸福が來る。的殺の關係で巽や東に本命が廻つても宜しいといふ事になる。それは三方が六方の働きを現して活動するからであります。

第十三號圖に於ては尙ほ東北の方に小さい『張り』があつて、**三合の張り、卽ち三合五行の張りといふものが出來て居る。**これは二棟建であるけれども、小さい家でこ

の位の吉相は少ない。これでも一旦は潰れるやうになるが、次の子供の代になると家相がよくなつて決して潰れつきりにはならない。潰れる家もあるが容易に潰れつ切りにならないのであります。

どの方位に跨つてもよいが、必ず三方跨りの様式の家を建てなければ『天相式』の艮家相の力は發揮出來ない。倉でも、離れでも、若くは工場でも同じ事だが、母屋から見て三方跨りの『張り』の吉相を造るならば六方の力となつて働いて來るから、最も力が強い譯であります。兎に角この第十三號家相は、『天相式』以外の家相としては最も艮相といふ事になるのであります。

——（家相奥傳講義・西之巻終）——

昭和十一年十月二十日印刷
昭和十一年十月三十日發行

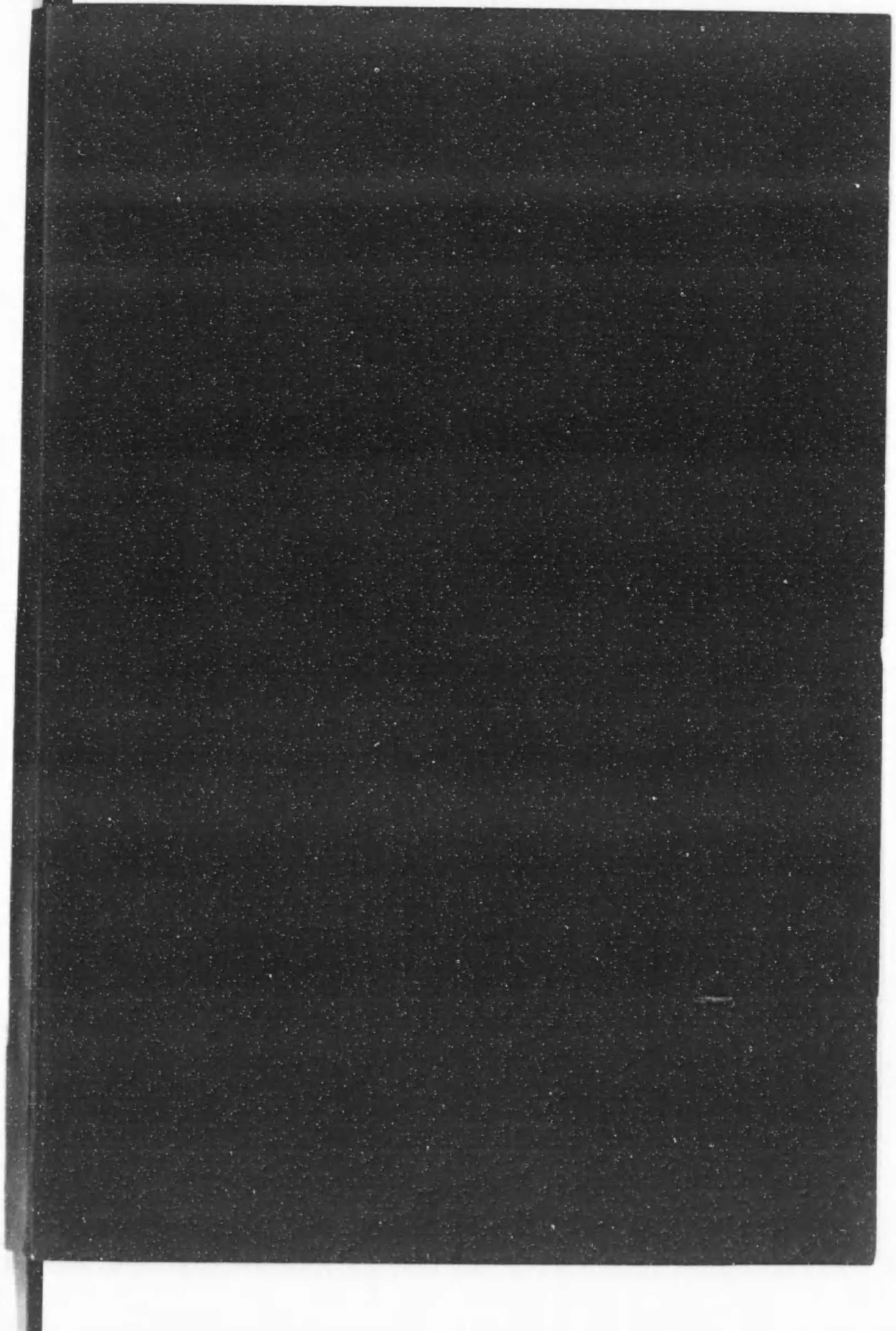
著作權所有

家相奧傳講義

定價金五圓

著作兼發行者　東京市杉並區上荻窪二丁目六十番地　園田眞次郎
印刷者　東京市板橋區練馬南町一ノ三五三二　小宮正義
印刷所　東京市板橋區練馬南町一ノ三五三二　株式會社日本印刷局

發行所　東京杉並區上荻窪三ノ六〇　大正館研友會本部
電話荻窪二〇五七番
振替東京三二五〇七番

發賣所　東京市小石川區宮下町五九　圖書出版　四明莊
電話大塚三三五〇番
振替東京二一八一五番

終